

令和 4 年度

愛知県埋蔵文化財センター

年報

2023

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

目 次

I. 令和4年度事業概要	1
調査の理由と工程	2
令和4年度調査遺跡位置図	4
II. 遺跡調査の概要	7
稲沢市 船橋宮裏遺跡(本発掘調査B)	8
清須市 清洲城下町遺跡(本発掘調査B)	9
名古屋市 名城公園遺跡(本発掘調査B)	10
断夫山古墳(本発掘調査B)	16
大口町 郷中遺跡(本発掘調査B)	17
瀬戸市 下品野遺跡(本発掘調査B)	18
安城市 亀塚・中狭間遺跡遺跡(本発掘調査B)	20
中狭間・宮下南遺跡(本発掘調査B)	24
下懸・寄島遺跡(本発掘調査A)	25
寄島遺跡(本発掘調査B)	26
向田遺跡(本発掘調査B)	28
姫下遺跡(本発掘調査B)	29
設楽町 滝瀬遺跡(本発掘調査B)	30
マサノ沢遺跡(本発掘調査B)	31
下延坂遺跡(本発掘調査B)	32
大畑遺跡(本発掘調査B)	38
大崎遺跡(本発掘調査B)	40
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡(本発掘調査B)	44
内貝津橋遺跡(本発掘調査B)	45
豊川市 花の木北遺跡(本発掘調査B)	46
野添遺跡(本発掘調査B)	48
豊橋市 吉田城址・飽海遺跡(本発掘調査B)	52
III. 刊行報告書抄録	53
第217集 石原遺跡	54
第219集 マサノ沢遺跡	56
第220集 一色城跡	58
第221集 胡桃窪遺跡・大名倉丸山遺跡・添沢遺跡	60
IV. 普及・公開活動の記録	63
埋蔵文化財展	64
朝日遺跡ミュージアム企画展/朝日遺跡ミュージアム ナイトミュージアムへの出店	66
連続歴史講座/栄中日文化センター協力講座/愛知県生涯学習推進センター協力講座	68
第11回 考古学セミナー 「あいちの考古学2022」	70
V. 埋蔵文化財センターの活動	73
資料の貸出・提供/ホームページ/その他普及事業	74
地元説明会・成果報告会/報告書作成のための指導/発掘調査における遺構・遺物などの指導/令和4年度愛知県埋蔵文化財センター組織一覧	75

I. 令和 4 年度事業概要

調査の理由と工程

1. 発掘調査

事業主体		事業名	遺跡名	調査面積 (㎡)	調査期間	調査担当
県建設局 道路建設課	一宮 建設事務所	道路改良事業 (一) 津島稲沢線	船橋宮裏遺跡	560	令和5年 1月～3月	堀木・武部
県建設局 下水道課	尾張 建設事務所	橋梁整備工事総合治水 対策特定河川工事(主) 名古屋祖父江線(清洲橋)	清洲城下町遺跡	1,195	令和4年12月～ 令和5年3月	樋上・蔭山
県スポーツ局 競技・施設課	新体育館室	愛知県新体育館 整備・運営等事業	名城公園遺跡	27,000	令和4年 1月～6月	鈴木正・永井邦・ 早野・鈴木恵・ 木村・宮腰・ 石黒
県県民文化局 文化芸術課	文化財室	史跡断夫山古墳 調査事業	断夫山古墳	100	令和5年 2月～3月	堀木・早野
県建設局 道路維持課	一宮 建設事務所	交差点改良工事 (一般県道斎藤羽黒線)	郷中遺跡	370	令和4年 7月～9月	堀木・武部
県建設局 道路維持課	尾張 建設事務所	主要地方道瀬戸環状線 改良工事(交付金)	下品野遺跡	300	令和4年 5月～7月	樋上・蔭山
県建設局 河川課	知立 建設事務所	中小河川改良工事	亀塚・ 中狭間遺跡	3,220	令和4年8月～ 令和5年2月	樋上・永井邦・ 木村・池本
			中狭間・ 宮下南遺跡	120	令和4年 6月～7月	樋上・池本・田中
			下懸・寄島遺跡	95	令和4年6月	樋上・池本・田中
			寄島遺跡	1,045	令和4年5月～ 令和5年3月	樋上・永井邦・ 池本・田中・木村
			向田遺跡	530	令和4年11月	樋上・永井邦・ 木村・池本
			姫下遺跡	595	令和5年 1月～3月	樋上・永井邦・ 木村
県建設局 道路維持課	新城設案 建設事務所	道路改築工事	内貝津橋遺跡	920	令和4年 7月～10月	永井宏・ 鈴木恵
県建設局 道路建設課	東三河 建設事務所	一般国道151号 (一宮バイパス)	花の木北遺跡	1,335	令和4年10月～ 令和5年3月	樋上・池本
県建設局 道路建設課	東三河 建設事務所	道路改良工事(交付金) 東三河環状線	野添遺跡	4,055	令和4年7月～ 令和5年1月	樋上・池本・田中
県防災安全局 危機管理課	東三河 建設事務所	東三河建設事務所改修 工事(発電機棟等建設)	吉田城址・ 飽海遺跡	100	令和4年12月	樋上・蔭山
国土交通省 中部地方整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	滝瀬遺跡	1,395	令和4年11月～ 令和5年1月	永井宏・ 鈴木恵
			マサノ沢遺跡	1,000	令和4年12月～ 令和5年2月	永井宏・社本
			下延坂遺跡	4,700	令和4年7月～ 令和5年2月	永井宏・渡邊
			大畑遺跡	2,080	令和4年 10月～12月	永井宏・社本
			大崎遺跡	2,985	令和4年 5月～10月	永井宏・社本
			上フロウ・ 下フロウ遺跡	340	令和4年 6月～7月	永井宏・川添

2. 整理・報告書編集

	事業主体		事業名	遺跡名	調査面積 (㎡)	調査年度
整理	国土交通省 中部地方 整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	滝瀬遺跡・マサノ沢遺跡・ 下延坂遺跡・大畑遺跡・ 大崎遺跡・内貝津橋遺跡・ 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	13,420	R.4
整理・報告	国土交通省 中部地方 整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	万瀬遺跡	10,250	H.26・R.1
	県建設局 道路建設課	一宮 建設事務所	道路改良工事 一般国道155号	白木遺跡	370	R.1
		新城設楽 建設事務所	道路改良工事（D3） 一般国道月バイパス	南山町遺跡	1,740	R.2・R.3
				引田遺跡	400	R.3
	県建設局 河川課	知立 建設事務所	中小河川改良工事	姫下遺跡	1,820	H.26・R.3
				寄島遺跡	3,228	H.26・H.28
				下懸遺跡	1,152	H.28・H.30
印刷・刊行	国土交通省 中部地方 整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	マサノ沢遺跡	2,050	H.29
				石原遺跡	13,850	H.30・R.1
				胡桃窪遺跡・添沢遺跡・ 大名倉丸山遺跡	5,030	H.27・R.2
	県建設局 道路建設課	一宮 建設事務所	県道給父稲沢線 道路改良工事	一色城跡	3,850	R.1・R.2

3. 令和4年度刊行物

・埋蔵文化財調査報告書（計4冊）

第217集 石原遺跡

第219集 マサノ沢遺跡

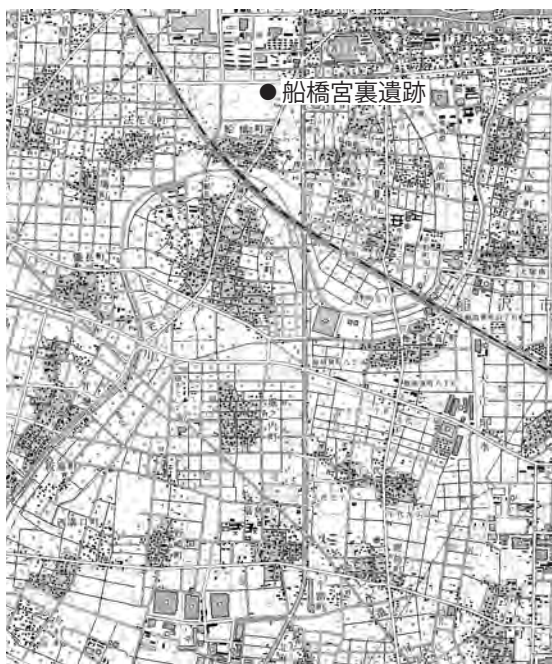
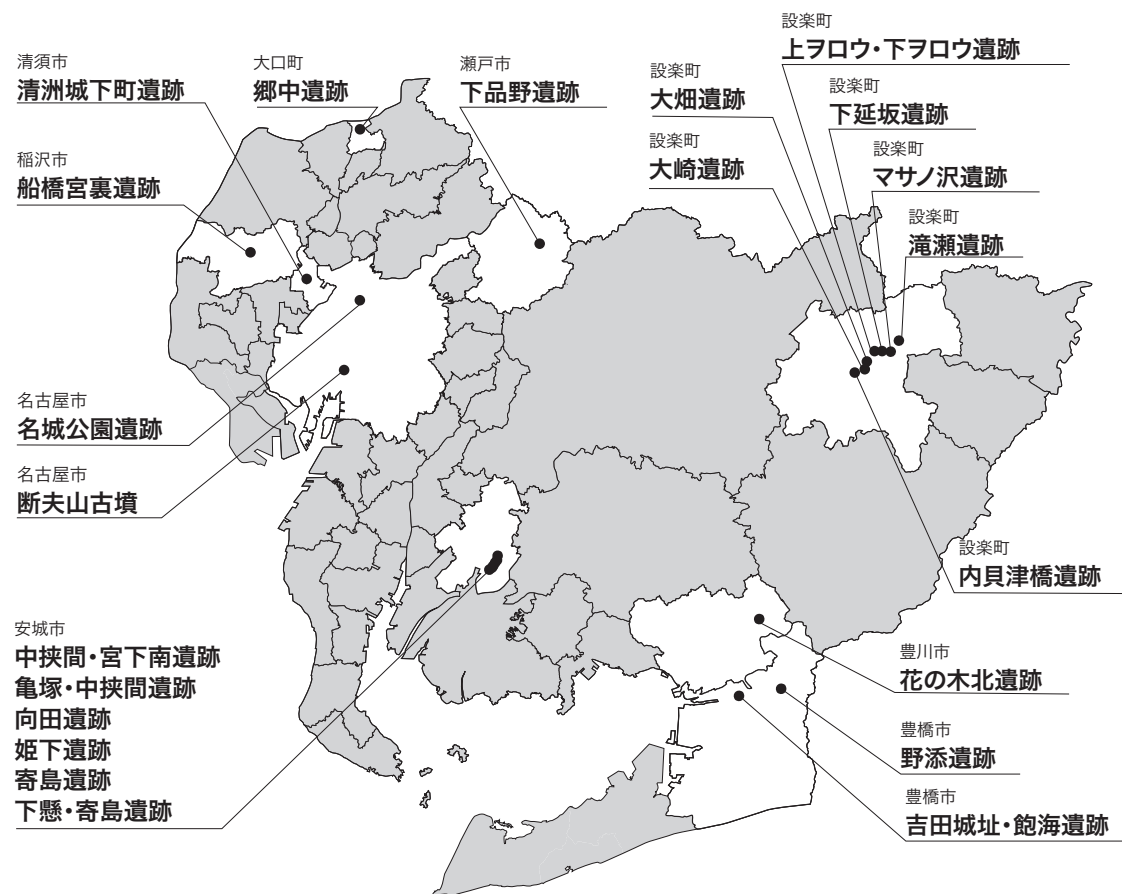
第220集 一色城跡

第221集 胡桃窪遺跡・大名倉丸山遺跡・添沢遺跡

・令和4年度 愛知県埋蔵文化財センター年報

・研究紀要 第24号

令和4年度 調査遺跡位置図



国土地理院 1/2.5 万地形図「清洲」

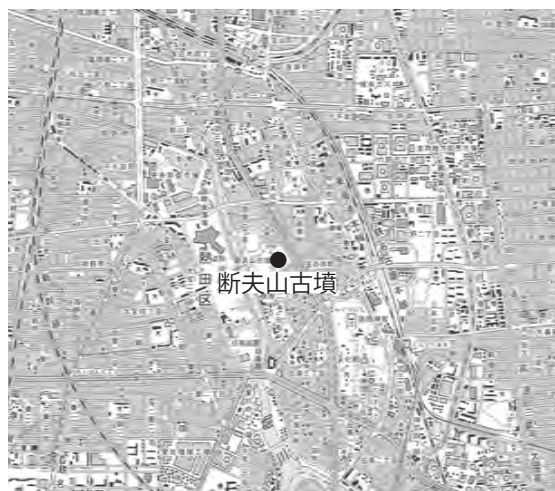


国土地理院 1/2.5 万地形図「清洲」

※地形図は 50%縮小しています。



国土地理院 1/2.5 万地形図「名古屋北部」



国土地理院 1/2.5 万地形図「名古屋南部」



国土地理院 1/2.5 万地形図「犬山」



国土地理院 1/2.5 万地形図「安城」・「西尾」



国土地理院 1/2.5 万地形図「猿投山」

※地形図は 50%縮小しています。



国土地理院 1/2.5 万地形図「田口」



国土地理院 1/2.5 万地形図「海老」



国土地理院 1/2.5 万地形図「新城」



国土地理院 1/2.5 万地形図「豊橋」



国土地理院 1/2.5 万地形図「豊橋」

※地形図は 50%縮小しています。

II. 遺跡調査の概要

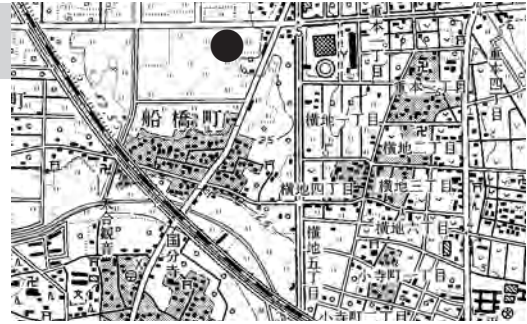
所在地 稲沢市船橋宮裏町地内
(北緯35度14分54秒 東経136度46分37秒)

調査理由 道路改良事業 ((一) 津島稲沢線)

調査期間 令和5年1月～3月

調査面積 560㎡

担当者 堀木真美子・武部真木



調査地点 (1/2.5万「清洲」)

調査の経過 調査は、道路改良工事((一)津島稲沢線)に伴うものであり、愛知県建設局道路建設課(一宮建設事務所)から愛知県民文化局を通じた委託事業として行った。令和5年1月～3月の期間に面積560㎡の発掘調査を行った。

立地と環境 遺跡は稲沢市の中心部を流れる三宅川の右岸自然堤防上に立地する。南へ約1kmの距離には尾張国分寺跡、同じく西には尾張国分尼寺推定地である馬場・法花寺遺跡をはじめ古代の遺跡も多数が分布する。

平成3年に発掘調査が行われた遺跡の北部では、火葬施設および方形や円形土壇からなる墓域が確認され、15世紀頃の集落縁辺部の景観がうかがわれた。このときの調査では、遺跡の立地する微高地範囲は南北に細長く、三宅川右岸域に分布する中世遺跡のうちでは西端にあたと指摘されている。

調査の概要 今回の調査地点は旧調査地点から南西に50mほど離れた場所にあり、現況是水田耕作地となっている。調査区内を南北に通る現況大畦の東側・西側とでは堆積状況の違いが認められ、また西側と南側への地形の傾斜が確認できる。明確な遺構は少なく遺物も希薄という状況から、遺跡範囲の南西端と考えられる。

まとめ 検出レベルや堆積状況は、旧調査地点の西部(水田地区)での様相とほぼ同様である。居住域としての土地利用には適さず、また広く削平を受けているとみられる。(武部真木)



遺跡遠景 (西から)

所在地 清須市一場地内

(北緯35度13分8秒 東経136度50分38秒)

調査理由 橋梁整備工事総合治水対策特定河川工事
(主) 名古屋祖父江線(清洲橋)

調査期間 令和4年12月～令和5年3月

調査面積 1,195㎡

担当者 樋上 昇・蔭山誠一



調査地点 (1/2.5万「清洲」)

調査の経過 本遺跡の調査は、橋梁整備工事総合治水対策特定河川工事(主)名古屋祖父江線(清洲橋)にともなう事前調査として、愛知県建設局道路整備課(尾張建設事務所)より愛知県県民文化局を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、令和4年12月から令和5年3月にかけて調査を実施した。調査区は清洲橋の南西、五条川右岸にある。調査面積は1,195㎡で、北側から22A区～22C区に分けて調査した。

立地と環境 清洲城下町遺跡は清須市中央部を流れる五条川兩岸の自然堤防状微高地とその後背湿地に広がる遺跡で、今回の発掘調査地点は清須城天守台跡の北にある内堀と中堀の中にあたる。

調査の概要 今回の調査では、戦国時代から江戸時代にかけての遺構と出土遺物が確認できた。

戦国時代～江戸時代前期初頭では、五条川右岸堤1基と溝12条、土坑12基を確認することができた。五条川右岸堤(054SX)の南西隅部には、河原石の円礫・亜円礫で集積した護岸施設(036SX)があり、河川側裾部に板石状の石材が張り付くように数個みられた。また036SXの裾部には巨礫が遺存する土坑が2基(004SK・053SK)あり、五条川の舟運に関わる施設の可能性がある。また五条川右岸堤上で確認された柱穴状土坑5基(044SK～047SK・051SK)も櫓台や幡立て台などの施設の可能性がある。

江戸時代では、五条川右岸堤から河川に至る河川敷(003SX)を確認することができた。

(蔭山誠一)



22B 区全景 (南東上空より)



22B 区 044SK ～ 047SK ・ 051SK SK007 (南西より)

名城公園遺跡(本発掘調査B)

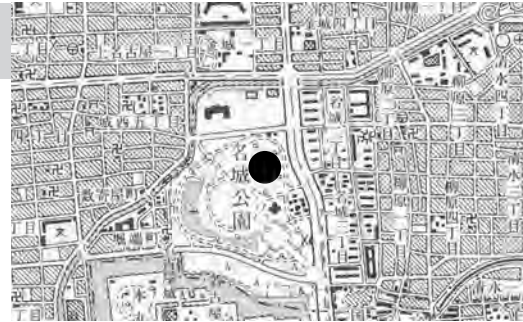
所在地 名古屋市北区名城1丁目
(北緯35度11分24秒 東経136度54分09秒)

調査理由 愛知県新体育館整備・運営等事業

調査期間 令和4年4月～6月

調査面積 27,000㎡

担当者 鈴木正貴・永井邦仁・早野浩二・鈴木恵介・
木村有作・石黒立人・宮腰健司



調査地点(1/2.5万「名古屋北部」)

調査の経過 調査は、愛知県スポーツ局による愛知県新体育館整備・運営等事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局から委託を受けて行った。当該遺跡では令和3年度(令和4年1月～3月)にも発掘調査を行っており、引き続き令和4年4月～6月に令和4年度の発掘調査を行った。両年度の発掘調査総面積は27,000㎡である。

調査区は表土掘削の進行状況に合わせて設定され、令和4年度の調査区(22A～C区)は主に発掘調査対象地の北東部に相当する。しかし、前年度に着手した調査区(21Aa～Cb区)の一部は年度内に表土掘削が完了しなかったため、年度を越えて発掘調査を継続した。

立地と環境 遺跡は特別史跡名古屋城の北側に位置し、名古屋城本丸などの所在する台地から約10m下った沖積低地にあり、標高は4.5～5.5mである。江戸時代には、名古屋城北堀に隣接する「御蓮池」とその北側に尾張徳川家の庭園である下御深井御庭が広がっていた。これらの土地は明治22(1889)年からは陸軍の練兵場となっていた。

調査の概要 遺跡の中央には南東から北西方向に抜ける旧河道が確認された。旧河道の形状は概ね古墳時代の状況であり、最大幅は約45mの谷地形となっている。その埋土は粗粒砂～円礫を主体としており、出土する須恵器の年代から奈良時代初頭までに河川堆積によって埋没したと考えられる。そして旧河道左岸(西側)には自然堤防とみられる微高地があり、ここを中心に古墳時代後期を中心とする集落が展開する。これに対して右岸(東側)では当該期の竪穴建物や掘立柱建物は少ないものの大型のものが所在し、左岸とは異なる土地利用状況がうかがえる。(永井邦仁)

21Aa・21Ca区 北東方向に傾斜する自然堤防状微高地の縁辺に相当する旧河道左岸の北部において、古墳時代前期後半、古墳時代後期、飛鳥・奈良時代、中世以降の各時期の遺構を検出した。

古墳時代前期後半の遺構として、平行する2条以上の溝00654SD・00688SD、00697SDを検出した。00688SDにおいてはS字甕、高杯を主体とする土器群、編物錘と思われる長細い自然石約15点の集積も確認された。

古墳時代後期の遺構として、竪穴建物、土坑等がある。竪穴建物は炭化材、炭化物層の広がりが見られるものの、掘方を明確に検出することは困難であった。炭化材が比較的良好に遺存する02135SIでは、炭化材に混じって須恵器有蓋高杯が伏せられた状態で出土した。竪穴建物の竈と思われる遺構として、焼土と炭化物に混じって須恵器杯が3個体逆位で重ねられた01513SX、須恵器蓋が石製支脚に被せられていた01250SL、竈内に台付甕が残されていた(02160SIに伴う)02149SL等がある。土坑00693SKからは、須恵器蓋杯・高杯・甕・鉢・筒形器台、土師器宇田型甕等が良好な状態で出土した。炭化物が互層状に堆積する浅い掘鉢状の落ち込み0095SXからは、須恵器鉢、土師器台付甕、砥石等が出土した。

飛鳥・
奈良時代

その他、まとまった遺物が出土した落ち込み状の遺構01519SX等の遺構がある。

飛鳥・奈良時代の遺構としては、竪穴建物、掘立柱建物等がある。竪穴建物は床面付近とその下位の掘方が検出された。01540SIは一辺約6mで、支柱穴が2棟分確認されること、竪穴建物の平面形がやや不整形であることから、別の1棟が重複していた可能性が高い。北辺に敷設された竈には、支脚を抜き取ったと思われる小穴に甕の口縁部から体部上半が伏せられた状態で残されていた。掘方からは須恵器有台杯が出土した。小型の竪穴建物01545SIは長軸約4.0m、短軸約3.5mで、東辺に竈を敷設する。竈側の床面一帯には炭化物層と灰層の薄層が互層状に累積した状態で検出され、その上面からは円面硯が出土した。

竪穴建物と掘立柱建物等から構成される集落の廃絶後には、自然堤防状微高地の西縁に沿って、ほぼ平行する2条の溝00150SD、00151SDが掘削される。また微高地上には平行する小溝群が掘削される。確実に遺構に伴う遺物がほとんどなく、詳細な時期は不明であるが、遺構の先後関係、埋土からは中世以前と推定される。(早野浩二)

21Ba区

微高地の南半部は、北部から連続する古墳時代の集落域となっている。集落の建物は大半が竪穴建物で、その平面規模は一辺約4mが大半であるが、一部に一辺約6m以上のものがみられる(01216SI・02199SIなど)。特に02199SIでは屋根材または壁材の一部と考えられる炭化材が広範囲で確認されており、焼失建物と位置づけられる。出土遺物は7世紀代の須恵器が多数ある。02199SIは旧河道(00035NR)左岸にきわめて接近しているが、00035NR左岸においてもラミナ状堆積の中から7世紀代の須恵器が多量に出土しており、河川を間近にした集落景観が想像される。また00035NRの堆積中には、須恵器を含む長径約3m規模の貝層01495SMがある。古墳時代集落の下層には、弥生時代後期初頭の竪穴建物02223SIがあり、建物規模は一辺約6mの隅丸方形である。

下御深井
御庭

21Ba区では、最上位面において江戸時代の溝や池状遺構が検出され、尾張藩の下御深井御庭の一部と考えられる。特に、調査区最南端部で江戸時代後期の瓦や陶器類の出土が集中し、庭園内施設である松山御茶屋付近の可能性が高い。また陶器類に伴って匣鉢や棚板などの窯道具も多く出土しているが、絵図等によれば当該地点から東方には御深井焼の



第1面調査時の遺跡全景(北から)

窯場があったと推定され、それに関連する遺物と位置づけられる。(永井邦仁)

2 1 B b 区 21Bb区西側には旧河道00035NRがあり、遺構が検出された範囲はこの00035NRの右岸にあたる。21Bb区東端部には古墳時代前期より前に形成された微高地が存在し、当初はこの微高地を回り込むように南から北へ00035NRが流れ、古墳時代前期以降に00035NR右岸側の堆積が進んだとみられる。この過程で陸地化した部分には、主に古墳時代後期～古代初め頃の遺構が検出された。また、微高地南端付近に遺物集積00967SUが存在する。

古 墳 時 代 後 期 00785SD(22Bb区：00757・00758SD、22A区：01160SD・01156SD)は同一の溝であり、微高地と旧河道の間を流れる。溝の長さは名城公園遺跡の中でも最長で(約180m)、21Bb区南東隅から00035NRに沿う形で北上し、22A区、22B区を通り遺跡の北側に抜ける。これと一部並行する溝が21Bb区に端を発する00929SD(22A区：01648SD・01155SD)であり、22A区では等間隔を保って北上する。

00958SD(22A区：01652SD)は21Bb区の微高地から北東方向に流れる溝である。北の22A区に入り、01648SD(22Bb区：00929SD)や竪穴建物01600SIとの重複地点から西の状況は不明である。これらの遺構との切り合い関係から、00958SDは他よりも古く位置付けられ、他の溝と向きが異なることから遺構の用途が異なる可能性がある。

竪穴建物00790SIは長軸(南北)6.3m、短軸(東西、残存長)4.6mを測る。北壁中央東寄りにカマドを1基配置する。西側は旧河道の溢水か自然流路によって削られて遺構の残存状態が不良で、床面がはっきりとしない。

古 墳 時 代 前 期 00967SUは古墳時代前期の遺物集積である。22Bb区東側に位置する名古屋市調査区付近から連続する。名古屋市による調査でも同様の遺物集積が確認されている。遺物の分布範囲は東西方向に長く拡がり、微高地や旧河道の方向と一致するが遺物の集積状況は流されてはおらず、遺物集積の北側の微高地上から廃棄されたと考えられている。このことから微高地上には何らかの遺構が存在したと推定されるが、主として練兵場時代より後の攪乱によって遺構が検出されない状況であった。(鈴木恵介)

2 2 A 区 旧河道右岸の北部に相当する22A区では、古墳時代の大型竪穴建物2棟(01600SI・



第2～3面調査時の遺跡全景(南から)

01601SI)が検出されている。いずれも平面規模が一辺約7mの正方形であり遺跡内で最大規模となっている。01601SIでは4基の柱穴および北壁中央に竈の遺構が確認されている。また01601SIの北西側には、2間×2間規模の総柱の掘立柱建物01630SBが1棟単独で所在しており、建物方位が共通するので建物群を構成していると考えられる。一方、北東側には若干方位の異なる掘立柱建物01190SBがあり、その柱穴には木製礎板のあったことが確認されている。なお、遺構の重複関係では01600SIから01601SIへ変遷しているが、その南方の22B区にある00790SIとともに旧河道左岸の密集する建物群からは孤立した存在となっている点は、集落構造を理解するうえで興味深い。

2 2 C 区 22A区からさらに北東側の22C区では00035SNに先行する旧河道(01157NR)が確認された。当該河道は00035NRの東側で南から北へ向かって蛇行する右岸の形状となっており、22C区内では弥生時代末期～古墳時代初頭の土器が多量に出土している。出土状況からは旧河道の東側微高地に当該期の集落が存在したことが推測される。(永井邦仁)



00693SK出土状況



01540SIの竈



江戸時代の窯道具類の出土状況



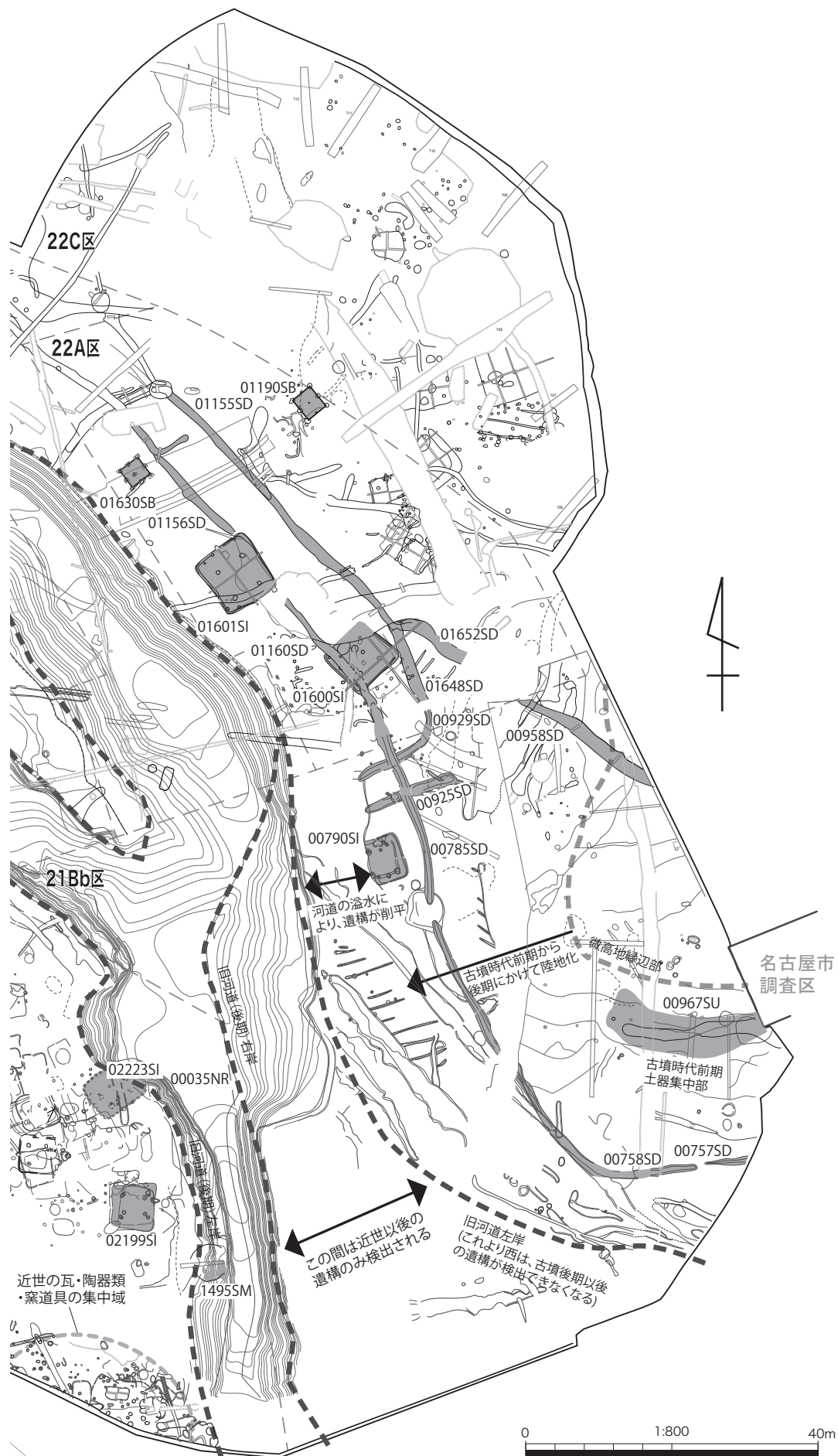
00958SD



00967SU出土状況



第2～4面遺構全体図(西半部)



第2～4面遺構全体図(東半部)

断夫山古墳 (本発掘調査B)

所在地 名古屋市旗屋二丁目
(北緯35度07分52秒 東経136度54分14秒)

調査理由 史跡 断夫山古墳調査事業

調査期間 令和5年2月～3月

調査面積 100m²

担当者 堀木真美子・早野浩二



調査地点 (1/2.5万「名古屋南部」)

調査の経過 発掘調査は史跡 断夫山古墳調査事業に伴う学術調査で、愛知県民文化局文化芸術課文化財室から委託を受け、一昨年度から継続して実施している。今年度は前方部南西側の一昨年度と対称となる位置に、前方部の墳端、周濠の規模、周堤の有無の確認を目的とした調査区 (22A区)、その外側に、周濠の有無の確認を目的とした調査区 (22B区) を設定した。

立地と環境 史跡 断夫山古墳は岬状に突出する洪積台地 (熱田台地) の南端西縁辺に立地する全長150mの大型の前方後円墳である。築造時期は墳形、過去に採集された埴輪と須恵器から古墳時代後期前半と推定されている。埋葬施設の構造は不明である。

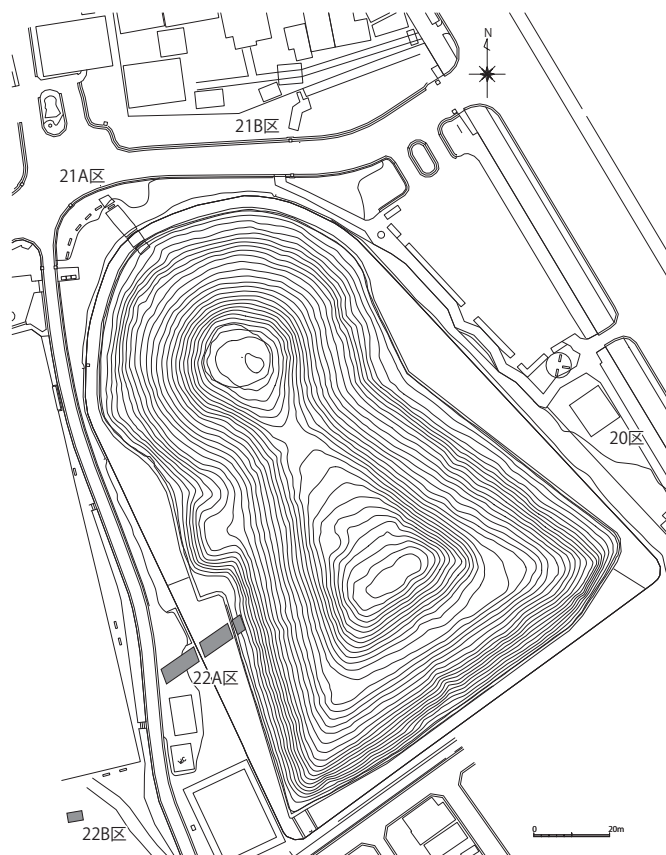
古墳の周辺には縄文時代の遺跡として玉ノ井遺跡、弥生時代の遺跡として高蔵遺跡、古墳時代後期の古墳として全長約70mの前方後円墳である白鳥古墳、古墳時代中期から後期を中心とする古墳群として高蔵古墳群が分布する。

2 2 A 区 22A区は史跡指定範囲である後円部最下段の墳丘部分と墳丘を囲う玉石垣間から指定範囲外の部分にかけて設定した。

墳丘部分は表土付近から円筒埴輪が散在して出土した。玉石垣間は基盤層まで剝かれていた。

指定範囲外の部分は濠状に浅く落ち込む状況を確認したが、中世以降に掘削、排土、整地が繰り返されたようで、周濠の南西岸付近は近世の大溝が掘削されていた。近世の整地層、溝内からは若干の円筒埴輪が出土した。

(早野浩二)



調査区位置図

ごうなか
郷中遺跡(本発掘調査B)

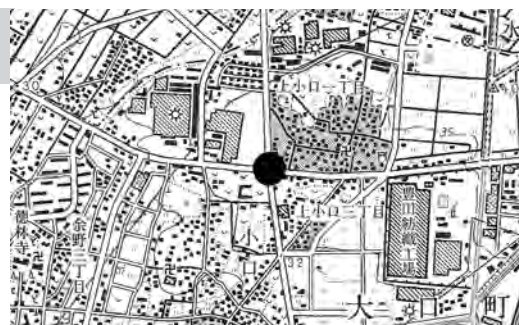
所在地 丹羽郡大口町上小口一丁目地内
(北緯35度20分48秒 東経136度55分03秒)

調査理由 交差点改良工事(一般県道斎藤羽黒線)

調査期間 令和4年7月～9月

調査面積 370㎡

担当者 堀木真美子・武部真木



調査地点(1/2.5万「犬山」)

調査の経過 調査は、交差点改良工事(一般県道斎藤羽黒線)に伴うものであり、愛知県建設局道路維持課から愛知県県民文化局を通じた委託事業として行った。調査対象地は上小口交差点の東西方向道路の北側にあたり、交差点を挟んで西側をA区、東側をB区と設定した。調査面積は計370㎡である。

立地と環境 大口町は尾張北部の犬山扇状地の扇央部に立地し、遺跡は隣接する扶桑町との境界に近い市域の北部に位置する。標高は31m前後である。近辺には多くの遺跡が分布し、旧石器時代の西山神遺跡や縄文時代の下林遺跡、後期古墳の善光寺古墳などが知られている。

調査の概要 A区の東端は小規模の谷状地形であり、これより西側に縄文時代中期後半の竪穴建物5棟、貯蔵穴の可能性のあるやや大型の土坑3基、中世の溝・土坑が確認され、縄文土器・石器、須恵器・土師器・陶磁器類が出土した。B区は後世の改変が激しく、主に近世から現代の遺構と思われる石列を伴う落ち込みや土坑・ピット等が見つかっている。

A区竪穴建物のうち遺存状況の良好な086SIは、当初径約8m規模の円形に近い隅丸方形のプランと検出されたが、少し位置の異なる竪穴建物の重複と判明した。竪穴の深さは検出面から約40cm、床面側壁際に幅20cm程度の壁溝(099SD)が巡る。より内側にも並行する溝(098SD)があり、先行する竪穴の痕跡として認められる。近接して086SIに先行する竪穴建物2棟が壁溝(073SD,074SD)で確認でき、さらに西へ約20m離れた地点にも一辺約4.0m規模の隅丸方形の壁溝(010SD)が確認された。遺物を伴う遺構は限定的ではあるものの、縄文時代中期後半を中心とした土器深鉢と数点の石器が出土している。

まとめ この一帯で活発化する縄文時代中期後半の集落の様相を伝える良好な事例となると考えられる。
(武部真木)



A区 竪穴建物(086SI 西から撮影)



縄文時代中期深鉢(085SK 縮尺1/6)

しもしなの
下品野遺跡 (本発掘調査B)

所在地 瀬戸市品野町五丁目地内
(北緯35度14分55秒 東経137度07分29秒)

調査理由 主要地方道瀬戸環状線交差点改良工事 (交付金)

調査期間 令和4年5月～令和4年7月

調査面積 300㎡

担当者 樋上 昇・蔭山誠一



調査地点 (1/2.5万「猿投山」)

調査の経過 本遺跡の調査は、主要地方道瀬戸環状線交差点改良工事 (交付金) にともなう事前調査として、愛知県建設局道路維持課 (尾張建設事務所) より愛知県県民文化局を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、令和4年5月～同4年7月に調査を実施した。調査区は国道248号と県道22号瀬戸環状線が交差する品野町6丁目交差点の南東側にある。調査面積は300㎡で、北側から順に22A区～22C区に分けて調査した。

立地と環境 下品野遺跡は瀬戸市北東部にある品野盆地の南東緩斜面にあり、北東から流れる水野川と南東から流れる鳥原川が合流する地点の南にある。遺跡周辺は古代末から現代にかけての陶器・磁器を生産する窯が数多く営まれた地域で、名古屋方面の南西から長野方面の北西にのびる中馬街道が巡っている。

調査の概要 今回の調査では、飛鳥時代～奈良時代と戦国時代、江戸時代後期～近代の主に3時期の遺構と出土遺物が確認できた。

(1) 飛鳥時代～奈良時代

竪穴建物1棟と土坑1基を確認することができた。竪穴建物007SIは22A区の南端部にて検出でき、昨年度に確認された21G区133SKの北につながる。竪穴建物は平面方形のもので、一辺4m程になる。西側の壁にカマドの一部と思われる粘土塊が確認された。土坑045SKは22B区にて確認できた幅0.53m、長さ1m以上を測る平面楕円形のもので、深さは0.30mであった。出土遺物には須恵器杯、壺、甕、土師器甕などがある。

(2) 戦国時代

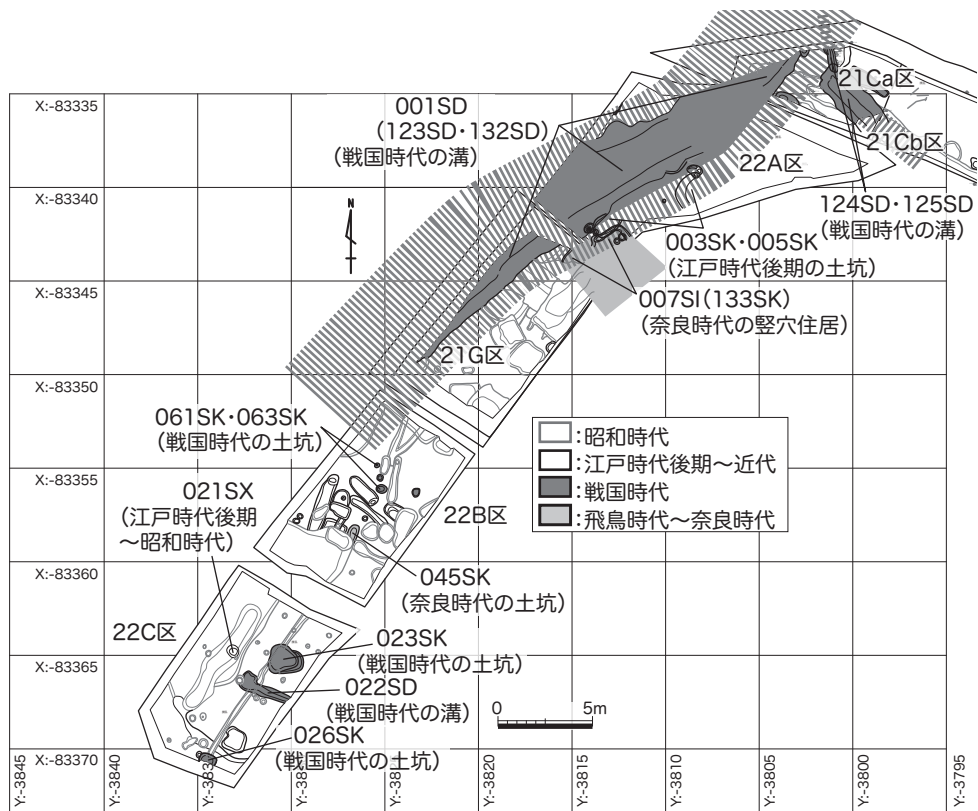
溝2条と土坑4基を確認することができた。溝001SDは22A区の西側を北東から南西に流れる溝で、昨年度確認された21Ca区123SDと21G区132SDとつながる。001SDは幅6mを超える断面逆台形の溝で、深さは遺構面から1.22mを測る。001SDは南にある22B区の西を流れる。22C区中央部にて確認された022SDは幅0.70m、深さ0.12mの浅い溝で、西側は途切れていた。22C区の南端で検出された土坑026SKは、平面が隅丸方形状で東西0.90mを測る。瀬戸美濃産陶器の灰釉緑釉小皿と土師器皿が重なった状態で出土した。出土遺物には瀬戸美濃産陶器の天目茶碗、皿、播鉢、壺、筒形製品、土師器皿などがある。

(3) 江戸時代後期～近代

土坑5基を確認できた。22A区で確認された003SK～006SKは江戸時代後期～近代の一連の土坑で、003SKは長さ2m、幅1m以上の大型土坑である。003SKからは土坑の南西側から廃棄され状態で、瀬戸美濃産陶磁器の碗、皿、徳利、播鉢などが多数出土した。

まとめ 今回の調査により、下品野遺跡における古代の集落が品野町六丁目交差点の西側に展開することが明らかとなった。また、戦国時代の集落も、溝001SDの南西側に広がるものと思われる。

(蔭山誠一)



下品野遺跡遺構平面図 (1:400)



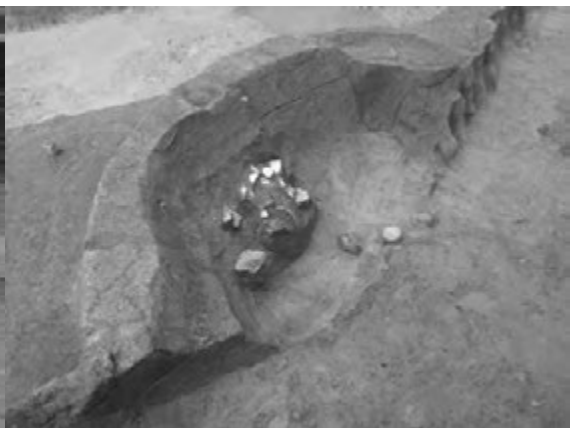
22A区全景 (南上空より)



22A区001SD (北東より)



22A区007SI (北より)



22C区026SK (北より)

かめづか なかはざま
亀塚・中狭間遺跡 (本発掘調査B)

所在地 安城市桜井町・川島町地内
 (北緯34度55分05秒 東経137度05分53秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 令和4年8月～令和5年2月

調査面積 3,220㎡

担当者 樋上昇・永井邦仁・木村有作・池本正明



調査地点 (1/2.5万「安城」・「西尾」)

調査の経過 調査は、愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局から委託を受けて行った。調査区は亀塚遺跡から北の中狭間遺跡までが連続しており、中狭間22A区と亀塚22G区間で遺跡が分かれる。調査区は、亀塚遺跡が亀塚(2AKZ)22A～22G区、中狭間遺跡が中狭間(2ANH)22A～22E区として設定された。調査面積は、亀塚遺跡が1,000㎡、中狭間遺跡が2,220㎡である。

立地と環境 遺跡は碧海台地東縁の崖下を南流する鹿乗川沿いの沖積低地の微高地に立地し、標高は中狭間22A区で約8.3m、これに対して亀塚22D区では約8.2mである。両遺跡は鹿乗川流域遺跡群(北群)の一部を構成しており、特に亀塚遺跡は鹿乗川(旧河道)と台地開析谷から流出する小河川(西町支線)が合流する地点に位置している。

調査の概要 中狭間遺跡では弥生時代中期後葉～弥生時代末期、古墳時代前期、平安～鎌倉時代の遺構と遺物が確認されている。ただし時代によって分布状況は異なり、弥生時代は主に調査区域南部(22A～C区)、古墳時代前期は同北部(22C～E区)に偏る傾向があり、平安～鎌倉時代の遺構はほぼ全域で分布している。以下、調査区ごとに概要を示す。(永井邦仁)

2 2 A 区 中狭間22A区は主な遺構は弥生時代の方形周溝墓3基と平安時代末期の井戸1基である。
方形周溝墓 方形周溝墓は3基確認されている。まず調査区南側の131SZは、北東溝(029SD)と南東溝(025SD)を検出している。025SDが北側で屈曲して029SDの東側と接続し、南側は壁面付近で幅が狭くなることや、029SDが調査区西壁付近で急に浅くなることなどから、調査区内でほぼ南北の対角線以東を検出したものと想定できる。想定される規模は一边10m程度で、周溝は、029SDが幅3.6m、深さ1.3m、025SDは幅1.8m、深さ0.9mとなる。出土遺物は乏しいが、025SD・029SDの基底部付近では、弥生中期のほぼ全形がうかがえる細頸壺を含む土器片が十数点出土しており、029SDからは弥生時代終末期～古墳時代初頭の高杯脚部と、ほぼ同時期と思われる木製品も出土している。現在検討中ではあるが、弥生時代中期に築造され、終末期～古墳時代初頭に再利用された可能性が高い。なお、周溝の埋没は緩やかに進行したものと考えられ、窪地を利用して029SDの中央には017SD、025SDの上面にはやや不整形な形状となる026SDが掘削されている。いずれも埋土中には山茶碗片が点在しており、中世以前に掘削されたものと考えられる。

1 3 0 S Z 次に調査区中央の130SZは、一边約6.0mのやや不整形な隅丸方形となる。周溝は074SDで幅0.8m、深さ0.3mを測る。ただし時期を想定できる資料に恵まれていない。

1 2 9 S Z 3基目は調査区北側の129SZで、北溝が095SD、東溝が093SD、南溝と西溝は屈曲する092SDで構成され、一边8m程度となる。095SD東端と093SD北端が陸橋部となり、幅は2m程度となる。周溝は095SDが幅1.5m、深さ0.6m、093SDは幅1.8m、深さ0.6mをはかる。092SDは幅1.0m、深さ0.5mとなるが、陸橋部の対角線上となる屈曲部では幅0.4m、

深さ約1.0mと狭くなる。出土遺物は093SDからややまとまった量を得ているが、注目できる資料に赤色顔料の付着した台石・鉢がある。このうち鉢は、弥生時代終末期～古墳時代初頭に属する。

- 1 4 2 S K この他に、特徴的な遺構として142SKがある。調査区南端で検出された土坑で、ほぼ全形をとどめる弥生時代中期後葉の壺が、口縁部を北西方向に向けた状態で出土している。

(池本正明)

- 中世井戸 井戸100SEは直径約3.0m、深さ約1.6mの土坑状であり、井戸として機能しなくなった後に井戸側や曲物などを撤去するために掘り返されており、そこへ山茶碗類(碗と小皿)と土師器伊勢型鍋が廃棄された状態であった。井戸の所在地は基盤層が砂質～粘質シルトであるが、井戸の最下部は細粒砂層であり湧水層となっている。

- 古墳周溝か 中狭間A～C区にかけて延びる溝(22A区106SD・22B区015SD・22C区073SD)は浅い皿状の断面をしているが、平面形は屈曲する区画溝の一部と考えられる。出土遺物は少ないが古墳時代の土師器や上層で須恵器杯身が出土している。古墳周溝の可能性はある。

- 2 2 C 区 中狭間22C区は、調査区北東部を近世の池状遺構が占めており、その西側に取り付く小溝がある。それ以外は方位の異なる小溝が北東～南西方向に延びており、池はそれ以降に掘削されたものと考えられる。小溝からは土師器が主体であるが若干の山茶碗類が出土していることから中世の耕作地にもなって施工された区画である可能性がある。そして小溝群に先行する竪穴建物跡7基が検出されている。これらは調査区北端と中部で重複関係のある群構成で検出される傾向にある。一部(053SI)では小型ながら幅広周溝状掘り方が確認されている。出土遺物は寡少なながら古墳時代前期と推測される。

- 22D・E区 中狭間22D区・22E区でも山茶碗類の出土する溝群が検出されており、これらも22C区同様に正方位から30～40°振れた斜方位となっている。とりわけ22E区037SDは幅約1.3m、深さ約0.7mで最大規模となっている。出土遺物には「大」と墨書された山茶碗がある。また22C区と同様に竪穴建物跡6～8基が検出されており、173SIや180SIでは幅広周溝状掘り方が確認されている。

- 亀塚遺跡 亀塚遺跡は弥生時代中期～弥生時代末期、古墳時代前期、奈良～平安時代の遺構と遺物が確認されている。

中狭間遺跡に南接する22G・F区では、亀塚22A区のような弥生時代中期の壺が出土する凹地地形がみられ、そこから南側では周溝墓がないなど様相が異なっており、両遺跡の境界に当たると考えられる。

- 2 2 F 区 亀塚22F区では、長径約3.5m、短径約0.8m、深さ約0.9mを測る長楕円形の大型土坑124SKがある。壁面はほぼ直立している。炭化物を多く含む埋土であり、底部から弥生時代中期の壺口縁部が出土している。当該土坑以外には竪穴建物跡1基と竪穴状遺構2基、また時期不明ながら掘柱穴が10基以上検出されており、掘立柱建物を構成するものと考えられる。

- 2 2 D 区 亀塚22D区では、西隣の20A区から続く奈良～平安時代の溝129SDがある。底部付近で若干のラミナ状堆積がみられるので水流があったことになる。遺物は奈良時代の須恵器蓋やK-90号窯式期の灰釉陶器が出土している。この他にも弥生土器の出土する溝020SDなどがある。

(永井邦仁)



中狭間22A区方形周溝墓129SZ(南東から)



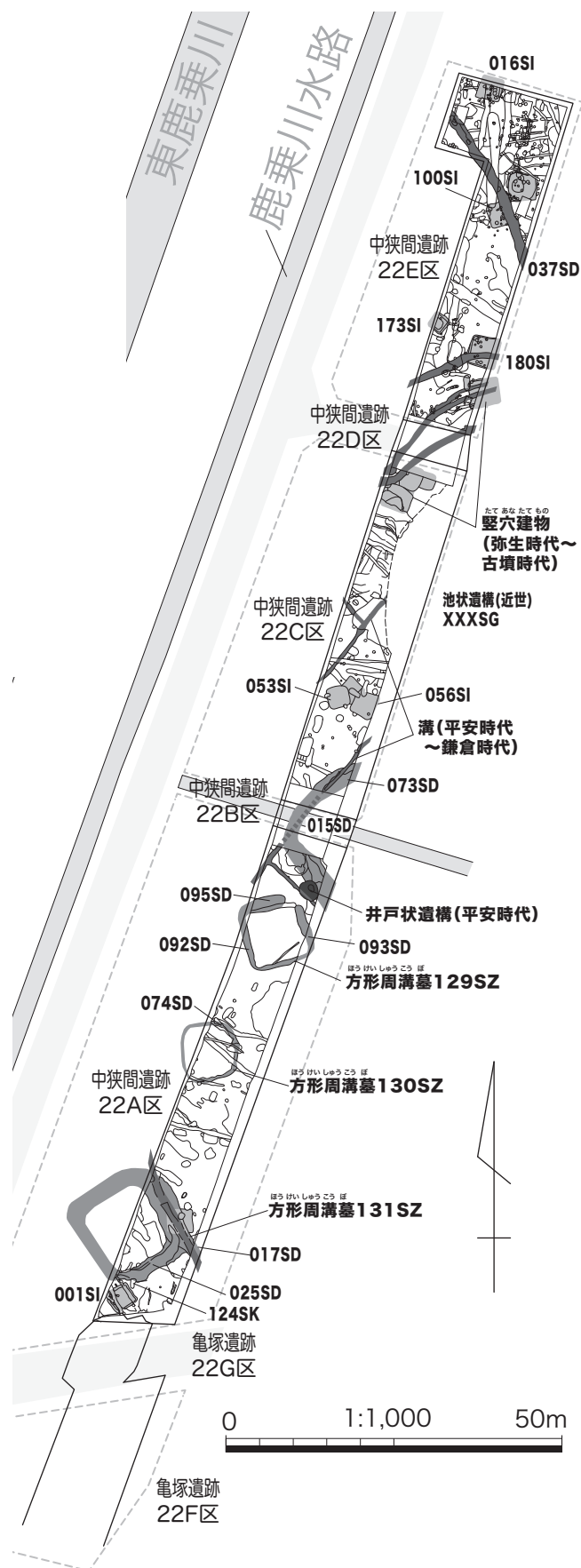
中狭間22A区方形周溝墓130SZ(南東から)



中狭間22A区方形周溝墓131SZ(南東から)



中狭間22A区土坑124SK出土の弥生時代中期の壺(北西から)



中狭間遺跡の概要



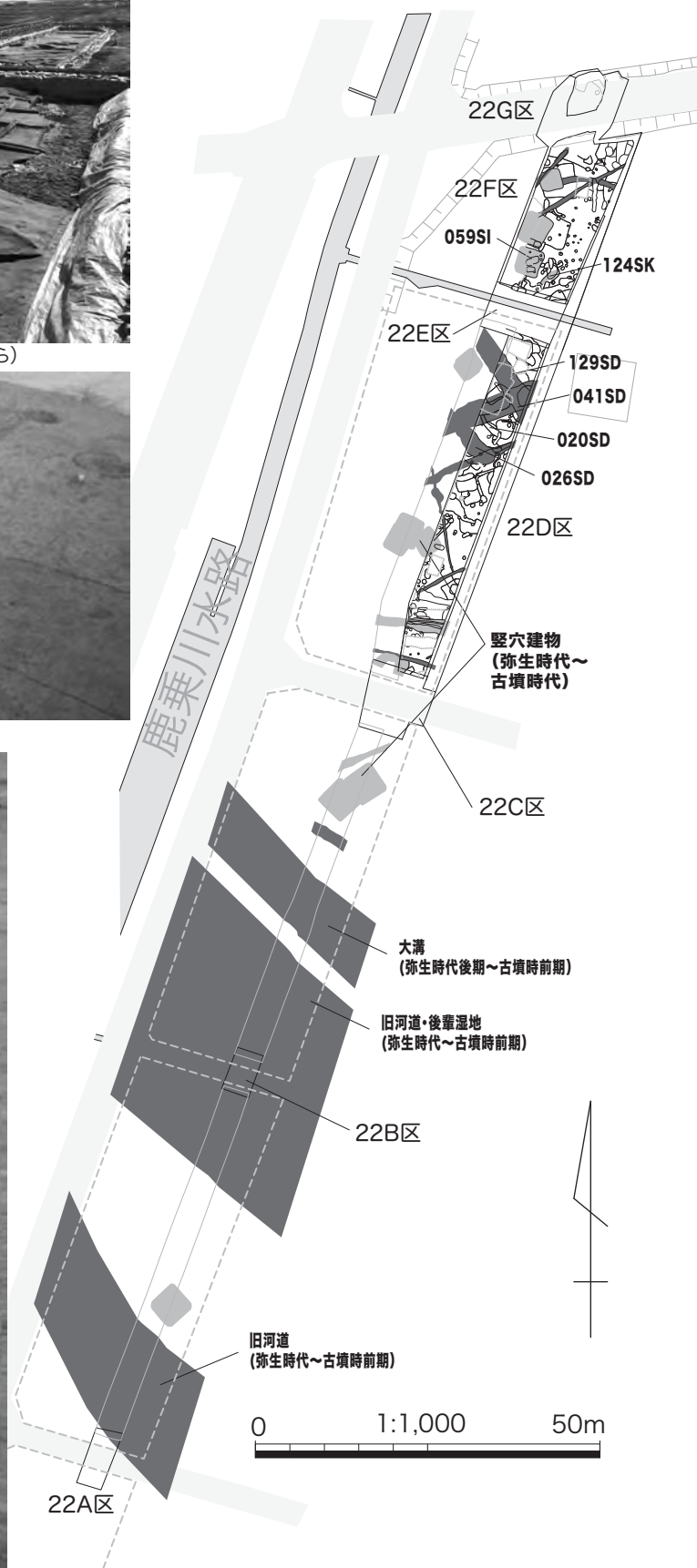
亀塚22F区(手前)・同D区(奥)全景(北西から)



亀塚22F区土坑124SK(南西から)



亀塚22D区溝状遺構020SD(北西から)



亀塚遺跡22D区・22F区の概要

なかはざま みやしたみなみ
中狭間・宮下南遺跡 (本発掘調査B)

所在地 安城市桜井町地内
(北緯34度55分25秒 東経137度05分58秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 令和4年6月～7月

調査面積 120m²

担当者 樋上 昇・池本正明・田中 良

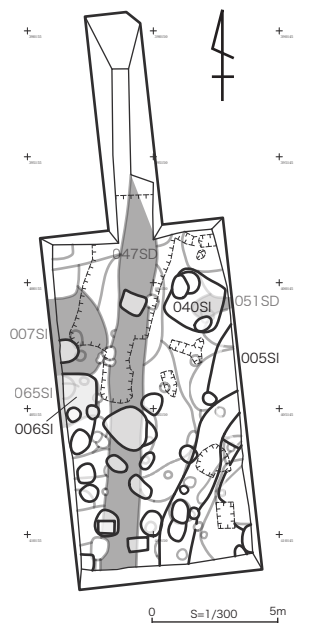


調査の経過 調査は愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査面積は計120m²である。遺跡の北側には、当センターによって平成23年度と平成25年度に調査された宮下遺跡がある。

立地と環境 遺跡は、鹿乗川と西鹿乗川が合流する地点で、標高約8mの沖積地上に立地する。周辺には、碧海台地縁辺に沿って古井遺跡群や桜林遺跡・中狭間遺跡・亀塚遺跡が並び、二子古墳や比蘇山古墳などの古墳が作られている。調査地点は、宮下南遺跡と中狭間遺跡の境に位置する。

調査の概要 調査は、にぶい黄褐色シルト層の上面で遺構が検出されたため、この面で調査を開始したが、この面の遺構よりも下位に、沈鉄を多く含む黒色土の埋土をもつ遺構が複数検出されたため、2面目を設定し、再度遺構検出をおこなった。その結果、前者の1面目では灰釉陶器を主体とした平安時代の竪穴状遺構(005SI・006SI・040SI)などを検出し、後者の2面目では、弥生時代終末期から古墳時代の大溝(047SD)や古墳時代の竪穴状遺構(007SI・065SI)などが検出された。

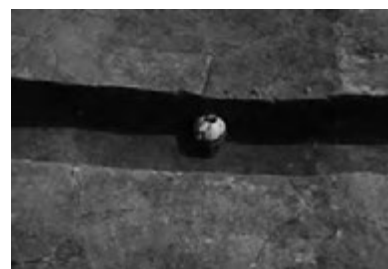
047SD 047SDは、弥生時代終末期の大溝で、掘り方の底面がV字状になる。この溝は、古墳時代に掘り返されており、上層の埋土からは、須恵器の蓋杯が出土している。下層の埋土からは、弥生時代終末期の小型壺や高坏などが出土している。(田中 良)



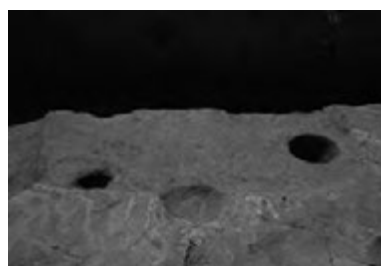
中狭間・宮下南遺跡の遺構全体図
S=1/300



大溝 047SD 完掘 (南から)



大溝 047SD 弥生土器出土状況



竪穴状遺構 065SI 完掘 (南から)



溝 051SD 弥生土器出土状況 (西から)

しもかけ よせじま
下懸・寄島遺跡(本発掘調査A)

所在地 安城市小川町地内
(北緯34度54分34秒 東経137度05分45秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 令和4年6月

調査面積 95m²

担当者 樋上 昇・池本正明・田中 良



調査地点(1/2.5万「安城」・「西尾」)

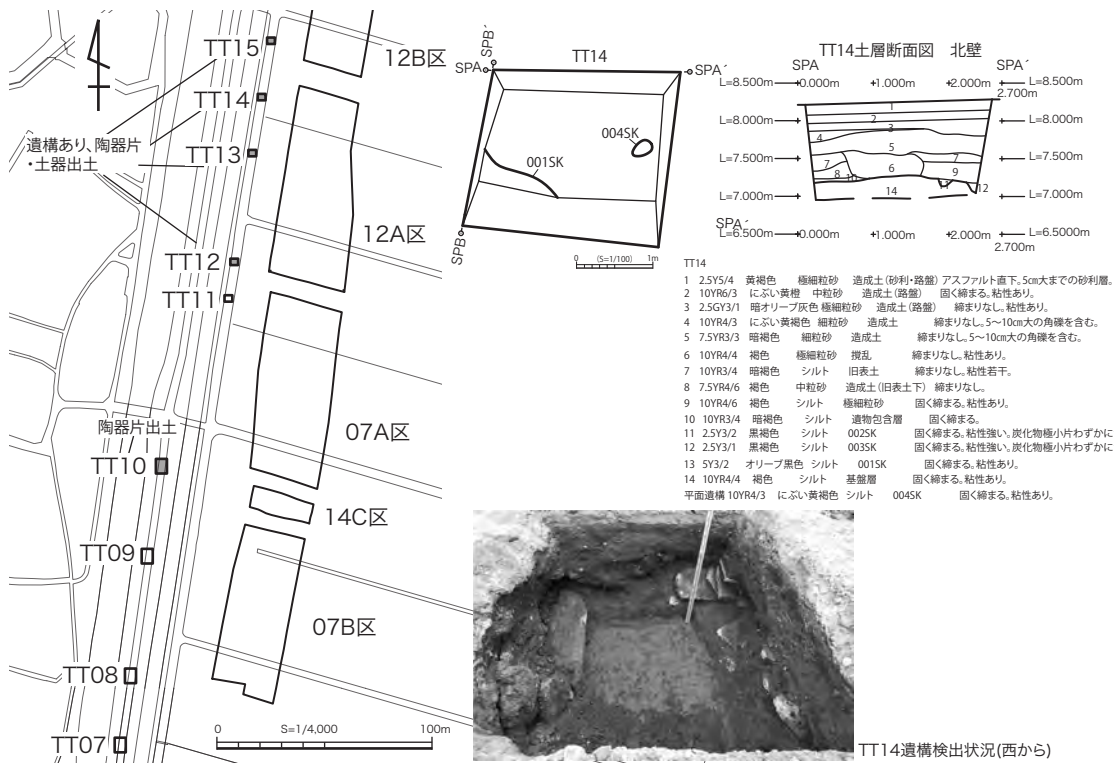
調査の経過 調査は愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査地点は、鹿乗川左岸と中堤防の事業予定地に、3m×6m、3.2m×5m、2m×2.5mのテストトレンチ(TT)を9箇所設定して、遺構と遺物を検出するとともに土層の状況を確認した。

立地と環境 遺跡は矢作川下流域の鹿乗川左岸の沖積地に立地する。遺跡の西方、鹿乗川右岸の碧海台地上には、前方後円墳の姫小川古墳をはじめとする、この時期の古墳群が展開する。

調査の概要 調査は、鹿乗川の中堤防に3m×6mのトレンチを3箇所、3.2m×5mのトレンチを1箇所設定し、鹿乗川左岸に2×2.5mのトレンチを5箇所設定し調査をおこなった。その結果、TT07～TT11では、攪乱によって遺構面が壊されていたが、TT12～TT15では、造成土の下に標高7.3m付近から遺構面が確認され、その遺構面から土坑が検出された。また、細片ではあるものの、土器片も出土している。

まとめ 今回の調査では、中堤防と左岸の一部は攪乱によって、遺構面は確認できなかったものの、左岸は残りが良くこれまでの調査と同様、古墳時代の遺構が展開する可能性が高い。

(田中 良)



下懸・寄島遺跡の本調査 A 概要図 S=1/4,000、TT14 平面図・土層断面図(S=1/100)

よせじま
寄島遺跡 (本発掘調査B)

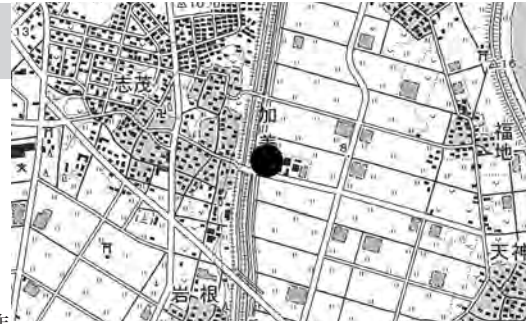
所在地 安城市小川町地内
(北緯34度54分34秒 東経137度05分45秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 令和4年5月～令和5年3月

調査面積 1,045㎡

担当者 樋上 昇・永井邦仁・池本正明・田中 良・木村有作



調査地点 (1/2.5万「安城」・「西尾」)

調査の経過 調査は愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。本遺跡は平成19年度から調査を開始し、今年度で6度目である。今年度は、加美橋の中堤防と左岸の道路部分と水路部分の調査をおこなった。調査区は中堤防を22A区、道路部分と水路部分は南から22B区～22E区を設定し、調査面積は計1,105㎡である。

立地と環境 遺跡は矢作川下流域の鹿乗川左岸の沖積地に立地する。遺跡の西方、鹿乗川右岸の碧海台地上には、前方後円墳の姫小川古墳をはじめとする、古墳時代前期の古墳群が展開する。現在の鹿乗川は、碧海台地東辺を直線的に南流し、川の左岸である遺跡周辺は平坦な沖積地である。中世以前の鹿乗川は沖積地を蛇行して走り、下懸遺跡・惣作遺跡・姫下遺跡で旧河道の一部が確認されている。当該遺跡は、この旧河道の周辺の微高地に展開し、標高は約7mを測る。これまでの調査では、主に古墳時代前期の集落跡と墓域が検出されている。

調査の概要 今年度の調査は、過去に調査区の間を調査する形で、14B区と14C区、07A区の間(22B区)と07A区と12A区の間(22C区)、12A区と12B区の間(22D区)、12B区と13A区の間(22E区)と新規の22A区の調査をおこなった。ここでは主に、22B区の調査成果を記述する。

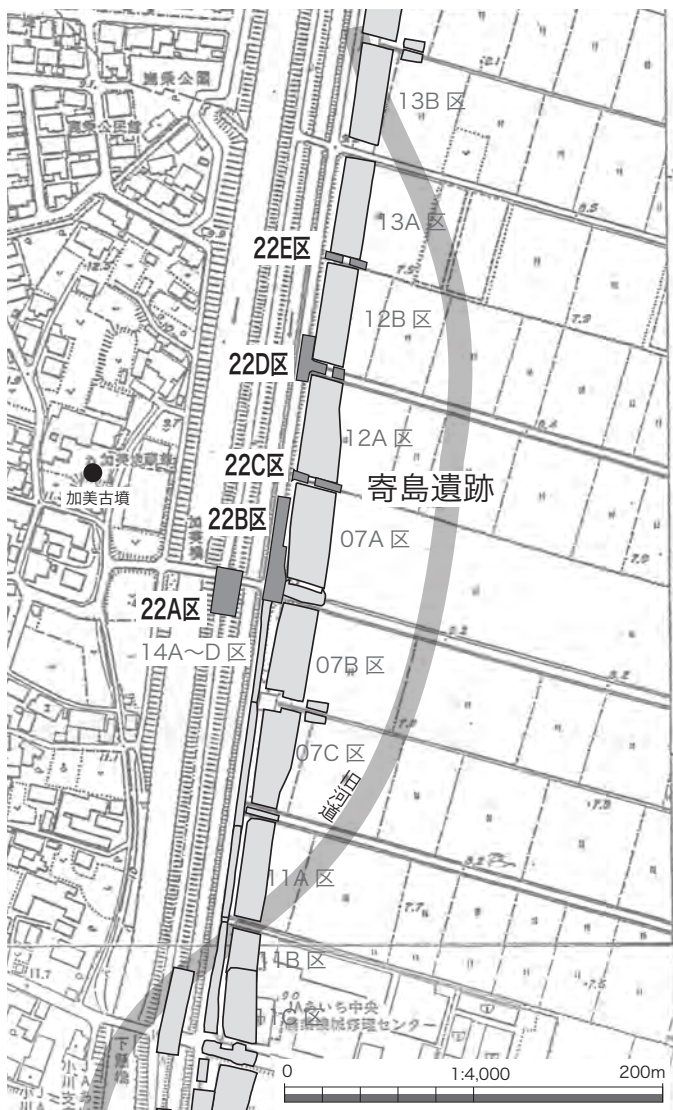
22B区では、K層(平安～中世の遺物包含層)を掘削したのち、その下層のシルト層上面で遺構検出をおこなった。その結果、弥生時代終末期～古墳時代前期の竪穴建物跡3基と大小の溝群などが検出された。

0 6 6 S I 066SIは、14C区から続く竪穴建物跡で、平面形は隅丸方形で壁溝を伴い、掘り方は幅広周溝状となる。建物の4分の1が検出され、床面で甕や線刻文土器が出土し、掘り方からは手焙り形土器が出土している。

0 3 5 S K 035SKは、066SIの上位から掘り込まれた土坑で、炭化物と台付甕など古墳時代前期の土器が多量に出土した。ただし、土器は小片となったものが大半である。

0 9 5 S D 14C区から続く、方形の区画溝である。溝は掘り返されており、場所によって掘り返し形状が異なる。①浅く(約15cm)皿状の掘り込みに基盤層(灰白色砂質シルト)主体の埋土と②溝中央部を深く(約30cm)掘り込み黒褐色シルトと基盤層ブロックの混合、その上に黒褐色粘質シルトの埋土のものである。いずれの埋土も、古墳時代前期の土器器を含む。

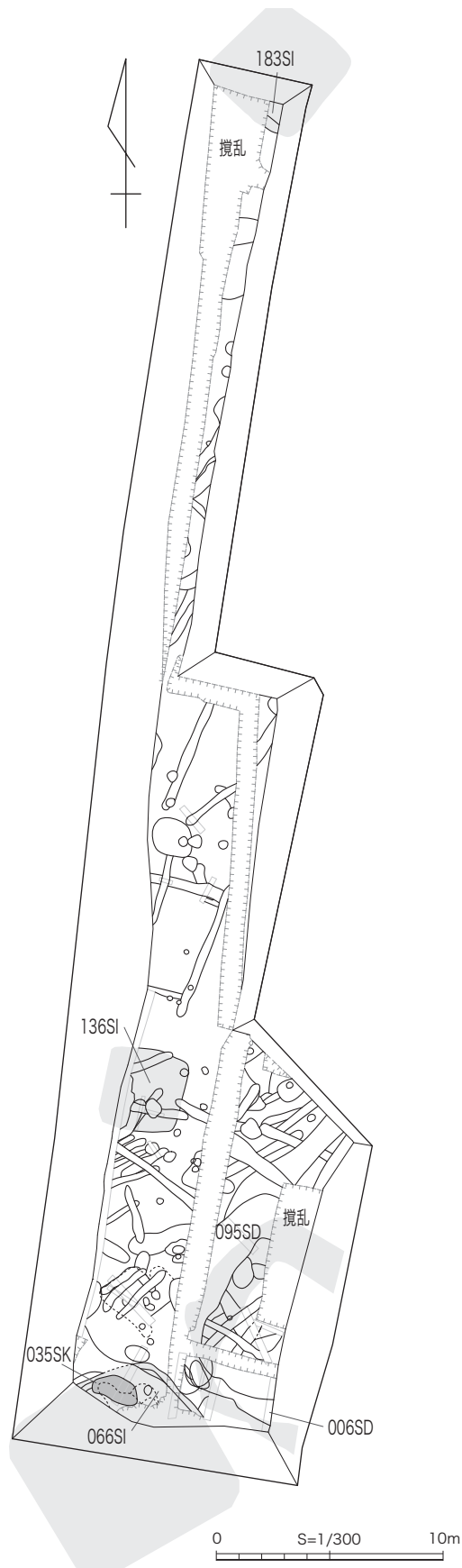
1 8 3 S I 183SIは、調査区の北東端に位置し、壁周溝(幅約15cm)と床面の一部がわずかに検出された。床面は炭化物が多く含まれているが、遺物がわずかに出土したのみで、時期は不明である。掘り方は床面から10cmほど下がる。(田中 良)



寄島遺跡の調査区配置



22B区 066SI出土の線刻土器



22B区の主要遺構

寄島遺跡 22B 区遺構全体図 S=1/300

むかいだ

向田遺跡 (本発掘調査B)

所在地 安城市東町秋葉下

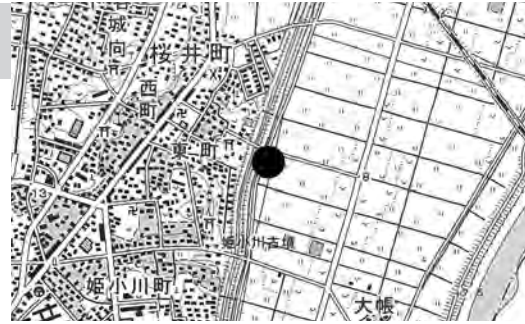
(北緯34度55分03秒 東経137度05分51秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 令和4年11月

調査面積 530㎡

担当者 樋上昇・永井邦仁・木村有作・池本正明



調査地点 (1/2.5万「安城」・「西尾」)

調査の経過 調査は、愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局から委託を受けて行った。調査面積は530㎡である。当該遺跡ではこれまでに平成29年度に計1,524㎡の発掘調査を行っている。

立地と環境 遺跡は碧海台地東縁から下った沖積低地に立地し、標高は約8.3mである。西方の碧海台地上には獅子塚古墳 (古墳時代前期) が立地する。

調査の概要 調査対象地は標高約7.3mに近世後半の遺物を包含する耕作土がある。その下位で顕著な遺構は検出されず、調査区南部において古墳時代前期～鎌倉時代の土師器・須恵器・山茶碗を包含する黒褐色粘土層が認められ、長らく沼地であったことが明らかとなった。一方調査区北部では、中粒砂の連続する側方堆積があることから河川堆積で形成された微高地と考えられる。ただし当該層からの出土遺物はないので形成時期は不明である。このように向田遺跡の大半は沼地または河道であり、亀塚遺跡以北と姫下遺跡以南を区分する境界のような場所であったと考えられる。
(永井邦仁)



向田遺跡における河川堆積の断面

ひめした
姫下遺跡(本発掘調査B)

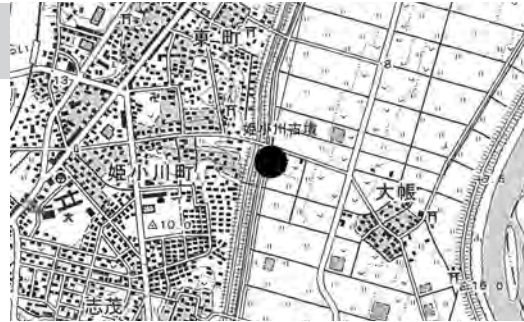
所在地 安城市姫小川町地内
(北緯34度54分45秒 東経137度05分47秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 令和5年1月～3月

調査面積 595㎡

担当者 樋上昇・永井邦仁・木村有作

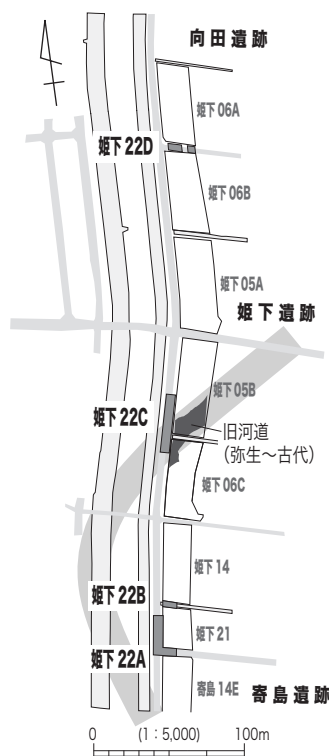


調査地点 (1/2.5万「安城」・「西尾」)

調査の経過 調査は、愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局から委託を受けて行った。当該遺跡では平成17～令和3年度に発掘調査がなされており、今年度は市道や用水路部分において4調査区が設定された。

立地と環境 遺跡は碧海台地東縁から下った沖積低地に立地し、標高は約7.0mである。遺跡西方約100mの台地上には姫小川古墳(古墳時代前期)が立地する。

調査の概要 22A区・22B区では、土師器と須恵器を包含する暗褐色～黒褐色シルト層下の基盤層上面で遺構が検出された。ただしその数は少ない。遺物の時期は古墳時代前期後半を中心としていることから、05A区・05B区・06C区から連続するものと位置付けられるが、比較的集落縁辺の状況を示唆する。これは、当該調査区の西側に南西方向に延びる台地の開析谷があり、そこからの支流との合流点によって不安定な地形になっていたことに起因すると思われる。一方、22C区は弥生～古代の旧河道の延長上となっている。(永井邦仁)



調査区配置と22A区の状況

たぎせ
滝瀬遺跡 (本発掘調査B)

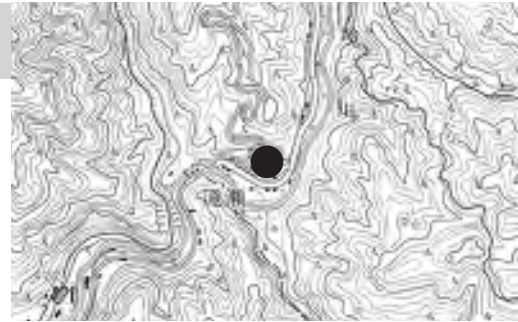
所在地 北設楽郡設楽町八橋タキセ
(北緯35度07分12秒 東経137度34分52秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年11月～令和5年1月

調査面積 1,395㎡

担当者 永井宏幸・鈴木恵介



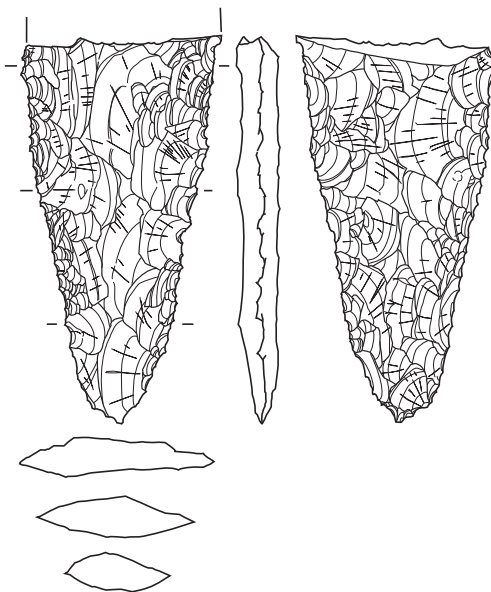
調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は設楽ダムに伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。

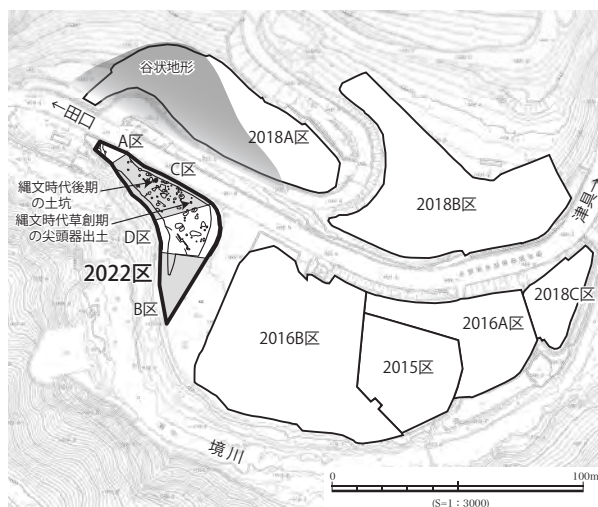
立地と環境 滝瀬遺跡は境川右岸の河岸段丘から丘陵斜面に立地する。本調査区は遺跡の中で最も境川の下流部分に位置する。現地表面の標高は421mで、調査で検出された基盤層の標高は419.5m～417mである。本調査区の基盤層は、近現代の耕地造成に伴って削平されたか、北側上位斜面にある2018A区で検出された谷状地形の影響を受けたと考えられる。

調査の概要 調査は、排土処理の都合上、A～Dの4区に分けて実施した(下図)。A・D区は基盤層が緩やかに傾斜しており、C区北壁沿いの平坦面付近では縄文時代後期の土坑1基(2016SK)、別の土坑(時期不明・2062SK)から縄文時代草創期の尖頭器(基部)を検出した(右図)。これらはC区中でも標高の高い位置で検出されている。同じC区内でも南半部は川に向かって傾斜が強くなり遺構は減少する。他のA・B・D区はC区北半部よりも標高が下り、遺構の検出数は減少する。今年度の調査区の中でも遺構の残存状況の差が明確にうかがえる結果となった。

(鈴木恵介)



0 10cm
土坑2062SK出土尖頭器(実測・川添 S=1/2)



滝瀬遺跡調査区配置図(S=1/3000)



滝瀬遺跡全景 (2022区は中央左下)

まさのさわ
マサノ沢遺跡 (本発掘調査B)

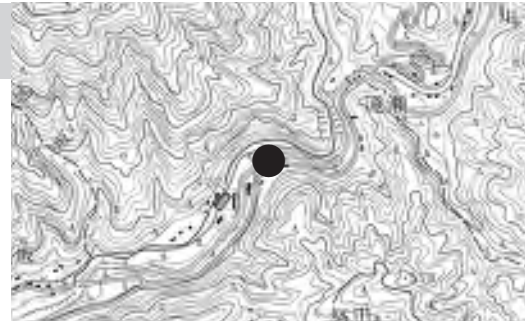
所在地 北設楽郡設楽町小松字マサノサワ
(北緯35度07分04秒 東経137度34分35秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年12月～令和5年2月

調査面積 1000㎡

担当者 永井宏幸・社本有弥



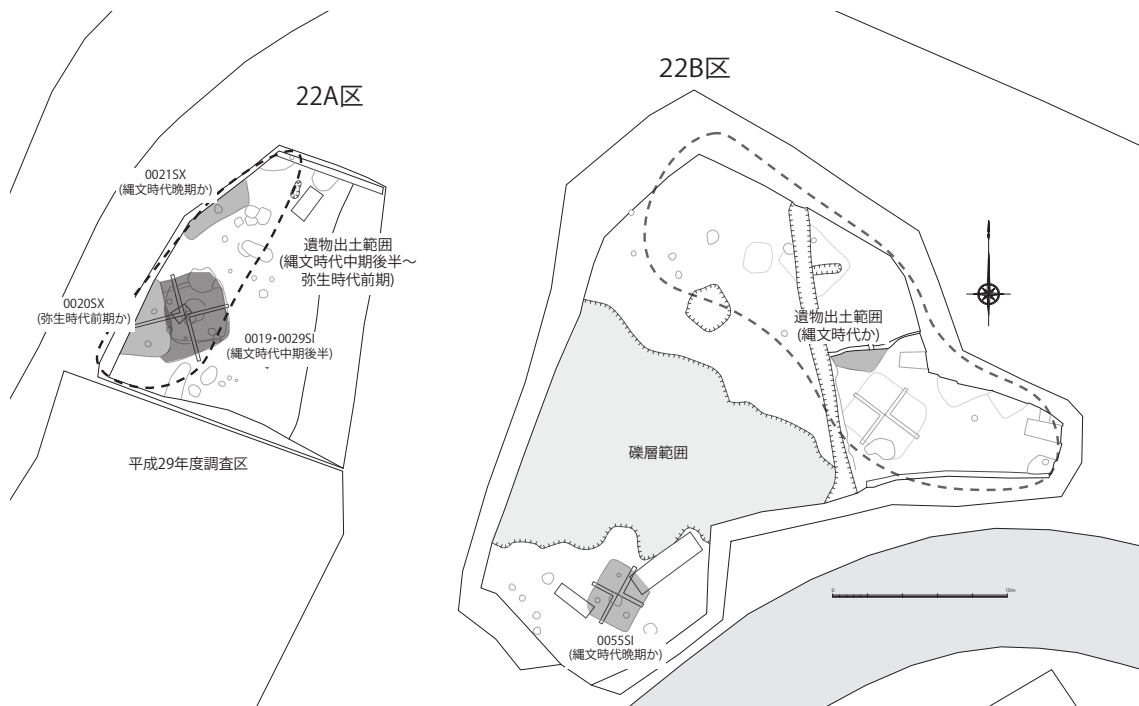
調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は設楽ダムに伴う事前事業として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県県民文化局を通じた委託事業として、令和4年12月から令和5年2月にかけて実施した。調査区は上段・下段に別れており、下段を22A区、上段を22B区として調査を行なった。

立地と環境 遺跡は、豊川水系に属する寒狭川の支流である境川の左岸に形成された幅狭な段丘面に位置する。遺跡付近は山腹に造成された県道によって地形が改変されたものの、境川が大きく蛇行する地点にあたり、北東から南西にかけて広がる緩やかな緩斜面に立地する。

調査の概要 22A区は西側で遺構・遺物を確認した。特に堅穴建物跡0029SIは長径約70cm、深さ60cmの大型の石囲炉が見つかり、炉の埋土から縄文時代中期後半にあたる土器片が出土している。炉の東には炭化物と被熱した土が入った土坑状の落ち込みがあり、おそらく副炉のような施設があった痕跡ではないかと考えられる。

22B区では東部で遺物の出土があり、大型の土坑や堅穴状遺構が確認されている。0055SXでは埋土から縄文時代晩期の土器片が出土している。それ以外の遺構も縄文時代のものであると思われるが、時期のわかる遺物は確認されていない。(社本有弥)



マサノ沢遺跡全体図 (1/500)

下延坂遺跡 (本発掘調査B)

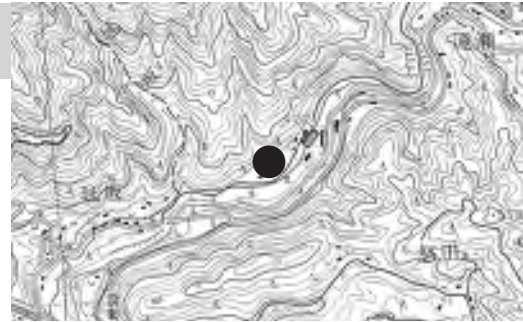
所在地 北設楽郡設楽町川向字上延坂・下延坂
(北緯35度06分58秒 東経137度34分28秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年6月～令和5年1月

調査面積 4,700㎡

担当者 永井宏幸・川添和暁・渡邊 峻



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて、令和4年6月から令和5年3月にかけて実施した。調査面積は4,700㎡で、東を流れる境川と西の山側の町道79号の間に広がっている。北から順に22A区、22B区、22C区の三ヶ所に調査区を設定した。

立地と環境 下延坂遺跡は境川右岸の川岸段丘から山麓の丘陵斜面に立地する遺跡で、本年度の調査区は、昨年の下延坂遺跡の発掘調査における調査区21B区の西側と町道79号の間を22A区とし、22A区の南側から昨年の調査区21B区と21C区の続きの範囲の内、北側の突出部を22Ba区とし、残る南側を22Bb区、22Bb区の南側を22C区とした。22A区の調査区の大部分は山の斜面に沿った石垣が残る棚田により削平されている。22A区に続く22Ba区は昨年の調査区でも確認された、かつて調査区に存在した養鶏場のコンクリート基礎が存在し、22B区と22C区を含む南側は植林による杉林が形成されていた。また、22C区の南側には西の山側から続く沢が流れており、南に向かって傾斜している。

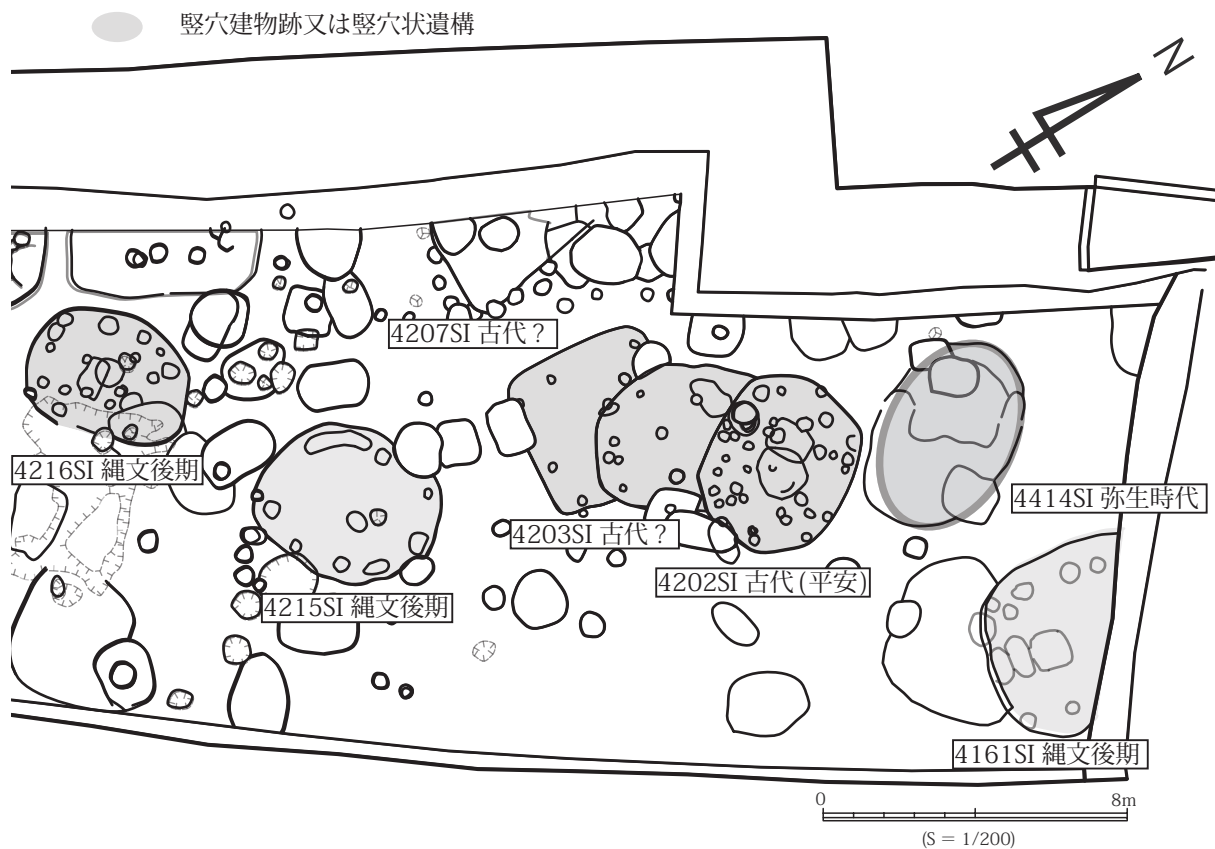
調査の概要 基本層序は第1・2層が調査区の北(22A区・22Ba区)と南(22Bb区・22C区)で若干異なる。

北側の22A区と22Ba区は第1層が調査区西を走る町道79号に伴う盛土による1~2m近い整地層である。22A区の第2層は棚田に伴う20cm前後の耕作土の層となる。第3層は所々に土石流の痕跡が見受けられる無遺物層の40cm前後の茶褐色の砂礫層、第4層が褐灰色の20cm前後の砂礫層で、第5層が無遺物層の黄褐色の40cm前後の砂層である。また22A区の調査区西壁のセクションを観察した結果、北から南にかけて地形が傾斜していることが確認された。一方22Ba区は3m近い1層目の盛土で、第2層は60cm前後の黒褐色の砂層となる。第3層は22A区の第4層で確認した20~50cmの褐灰色の砂礫層、第4層が22Ba区の第5層である黄褐色の砂層となる。おそらく先に述べた地形的な傾斜により22Bbでは22A区の第2層まで道路工事の盛土によって削平されていると思われる。また、22Ba区の西壁セクションを観察すると、南から北にかけて傾斜している。22A区と22Ba区の境付近が一番深い谷状の地形と思われる。

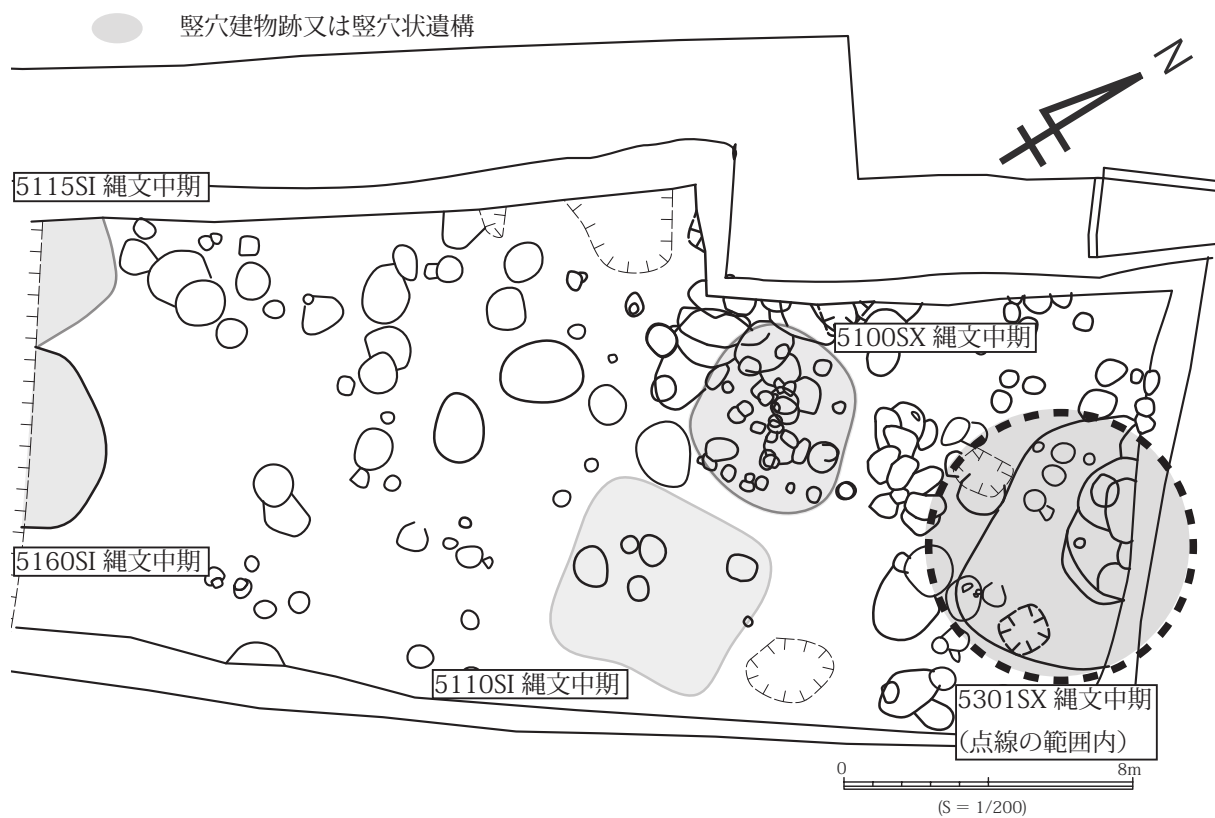
南側の22Bb区と22C区では北側のような道路の盛土は確認されないが、代わりに植林や(第1層)や畑作(第2層)によって削平されており、北で確認された褐灰色の層は一部までしか残っていなかった(第3層)。第4層の黄褐色の砂層は所々に土石流の痕跡があり、第5層の明黄褐色の礫層、地山の岩盤層と続く。22Ba区の黒褐色層が縄文時代後期、各調査区の褐灰色層が縄文時代中期、黄褐色の無遺物層が縄文時代前期、明黄褐色層が縄文時代早期を想定している。



下延坂遺跡 遺構全体図 1 面目 (S=1/1,250)



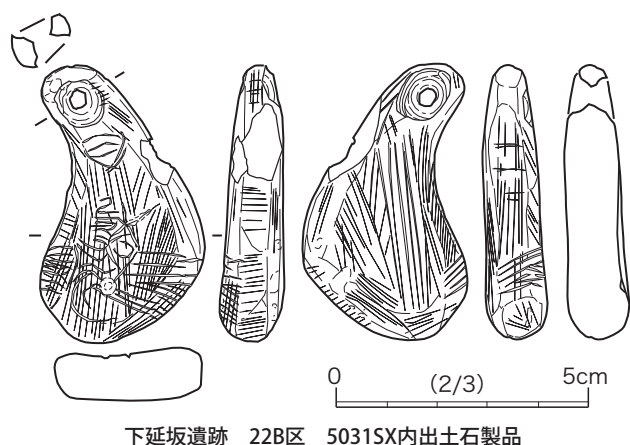
下延坂遺跡 22Ba 区 1 面目 略測図 (S=1/200)



下延坂遺跡 22Ba 区 2 面目 略測図 (S=1/200)

- 中 世 竪穴状遺構3001SXと3002SXは22A区の黒褐色の土層から検出された遺構であり、
- 2 2 A 区 3001SXが3002SXを切っている関係にある。遺構は22A区の調査区西壁に続いており、断
- 3 0 0 1 S X 面を確認した限りでは立ち上がりと底部で平坦面を確認し、弥生土器と思われる土器片
- 3 0 0 2 S X と石器も数点確認されたので当初は方形の竪穴状遺構が想定された。しかし、どちらの遺構も柱穴や炉跡などは床面で確認されず、3002SXからは山茶碗の小皿が確認されたので、中世の耕作地とそれに伴う耕作土であったと思われる。
- 2 2 B 区 4202SIは22B区北側の一面目の黒色の土層から、中央北寄りで検出された直径約4mの
- 4 2 0 2 S I やや楕円形な竪穴状遺構である。遺構の壁面に壁柱穴と思われる複数の土坑と、竪穴の中央北寄りに炭化物が比較的多い土坑が確認され、これが炉跡と思われる。この炉跡付近を掘削中に床面から灰釉陶器の高台が確認されたので、時期は古代(平安)と推測される。
- 2 2 C 区 炉跡6096SLは22C区と22B区の境付近で確認された直径約1m前後の遺構で、22B区1面
- 6 0 9 6 S L 目の中世の耕作域と同じ茶褐色の土層より確認された。炭化物と焼土が良好な状態で纏まって出土しており、鉄片が1点確認された。付近に竪穴や柱穴が確認されなかったので、屋外の鍛冶場遺構と思われる。
- 縄文後期 4161SIは22B区北側1面目の黒色土の層より検出された、昨年の調査区21B区との境に
- 4 1 6 1 S I 半分切られている竪穴建物跡である。直径は推定で4m以上の隅丸方形の形と思われる。複数の壁柱穴と炉跡と思われる炭化物を伴う土坑が検出され、複数の縄文土器の土器片(後期初頭)と石器(剥片)が出土した。
- 4 2 1 5 S I 4215SIは22B区北側1面目の中央南寄りの黒色土の層より検出された。直径4m前後の円形の竪穴建物跡である。複数の壁柱穴と、中央やや東寄りに炭化物を伴う炉跡と思われる土坑が確認される。遺物は少ないが、後期初頭の土器片と石器(剥片)が数点確認床面で確認されている。
- 4 2 1 6 S I 4126SIは22B区北側1面目の黒色土の層より検出された、直径3.5m前後のやや楕円形の竪穴建物跡である。複数の壁柱穴と、中央に炭化物をわずかに伴う炉跡と思われる小さな土坑が確認される。また、竪穴建物跡の埋土の中や4216SIを切る形で存在する土坑4373SKでは多数の拳大の礫が集中して検出されたことから、使い終わった竪穴に礫を廃棄していたのかもしれない。
- 2 2 C 区 6099SKと6100SKは22C区2面目の南東、茶褐色の土層で確認された良好な縄文土器の
- 6 0 9 9 S K まとまりを伴う土坑であり、直径1m前後の楕円形の6099SKを直径80cm前後の同じく楕
- 6 1 0 0 S K 円形の6100SKが切っている関係である。6099SKと6100SKはそれぞれ別個体の縄文土器を伴っており、時期はどちらも後期の土器と思われる。6099SKは縄文土器の下に複数の礫が確認され、意図的に礫を配置しその上に縄文土器を置いたようである。6099SKは更に2層に別れ、下層では被熱した拳大の礫が数点、同じく被熱した40cm前後の巨礫が出土し、焼土も確認された。石囲炉であったのを解体し、土器と共に埋めた可能性がある。

- 縄文中期** 5110SIは22B区北側の2面目の褐灰色の土層より検出された、直径3.5m前後の円形の
5110SI 竪穴建物跡である。壁柱穴と炉跡と思われる、石の抜き取り痕がある土坑が床面の中央やや南寄り
 で検出される。遺物は縄文時代中期後半と思われる土器片と石器(剥片)が数点確認され、竪穴の埋土より石棒
 と思われる円柱状の石器が炉跡の付近で確認された。
- 5100SX** 5100SXは22B区北側の2面目の中央付近、褐灰色の土層より検出された直径5m近い隅丸方形の遺構である。しかし5100SXでは複数の大型土坑に切られており、トレンチでは立ち上がりを確認できたのだが柱穴や炉跡などの付属施設は確認されなかった。5100SXは例年の下延坂遺跡の調査では例がないほど、多くの遺物が検出されている。いくつかは切っている複数の大型土坑に属するものであるが、床面の検出段階で凡そ80点近い遺物を点上げし、それ以上の数を一括遺物として取り上げた。縄文土器は縄文時代中期後半のものがほとんどで、石器は多数の剥片と、黒曜石の石鏃数点が確認される。またこの竪穴状遺構の床面で検出された50cm前後の土坑5255SKでは、5110SIで確認されたような石棒と思われる円柱状の石器が検出された。
- 5301SX** 5301SXは22B区北側の2面目の褐灰色の土層より確認された、多数の巨礫と遺物を伴う谷状の遺構である。22B区北側から22B区調査区の北側の境に向け広がっている。出土する遺物は縄文中期後半の土器片やそれに伴う石器が多い。石器は剥片や丸石、皿石などの他に、20点以上もの黒曜石の剥片と、1点の石鏃を確認した。また調査区の境の壁断面で確認できる谷状の落ち込みの一番下層からは、縄文時代後期のものと思われる土器片が纏まって出土している。たまたま落ちた可能性もあるが、その土器の周辺だけ別遺構が展開している可能性もある。残したベルトのセクションで確認したい(2月10日現在)。また、注目される遺物として、縄文時代中期後半の土器と一緒に出土した岩偶が挙げられる。詳しくは後述するが、この時代のものとしては貴重な資料である。
- 縄文早期** 5056SIは22B区の2面目の南端、茶褐色の土層より検出された縄文時代早期後葉と推定
22B区 される直径約3.5m前後の円形の竪穴建物跡である。22B区と22C区の調査区の境目にトレン
5056SI チを設定し掘削していた際に、茶褐色の土層より縄文時代早期の繊維土器が確認された。2021年度の下延坂遺跡の調査でも数点土器片が確認されていたので、周囲を精査したところ切り合い関係にある竪穴状の落ち込みが2棟確認された。5056SIはもう片方の竪穴建物跡5058SIを切っている竪穴建物跡である。トレンチの断面では床面と思われる平坦面と立ち上がりが確認されたが、残念ながら柱穴などの遺構や遺物は確認されなかった。
- 5058SI** 5058SIは22B区と22C区の2面目を跨る形で展開する、茶褐色の土層より検出された縄文縄文時代早期後葉と推定される直径約3m前後の円形の竪穴建物跡である。こちらも先の5056SIと同じように床面と立ち上がりは確認されたが、遺構・遺物は確認されなかった。
- 22C区** 6101SKは22Cの2面目の南東、茶褐色の土層で確認された良好な縄文時代早期後半の
6101SK 土器のまとまりを伴う直径30cm前後の土坑である。土器は礫に覆われており、意図的に礫を配置したと思われる。
 (渡邊 峻)



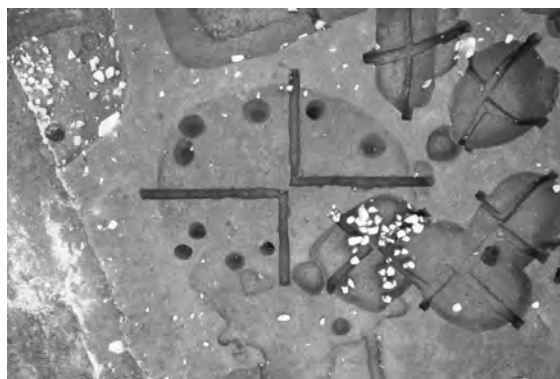
下延坂遺跡 22B区 5031SX内出土石製品

左図の石製品は、くの字に屈曲した扁平礫の表面を調整加工後、穿孔や線刻が施されているものである。調整は、一部側面の研磨を除き、剥片石器などによるケズリを主体とする。穿孔は図面上側の大きいものと、図面下側の身部中央に小さい盲孔が認められる。線刻は3条を1単位としており、脇にはそれを括るような直線・曲線も施されている。時期は縄文時代中期後半の神明式～取組式期と考えられる。石材は、当地にある砂質凝灰岩もしくは凝灰質砂岩で、後の縄文時代後期中葉以降に当地で出現・盛行する岩偶岩版類と使用石材は同じである。

(川添和暁)



下延坂遺跡 全景(北東より)



下延坂遺跡 22Ba区(1面目) 竪穴建物跡4216SI



下延坂遺跡 22C区(1面目) 炉跡6096SL(東より)



22B区北側(2面目) 竪穴状遺構 5100SX遺物出土状況(東より)



22B区北側(2面目) 谷状遺構 5301SX(北より)



22B区北側(2面目) 岩偶 出土状況(西より)

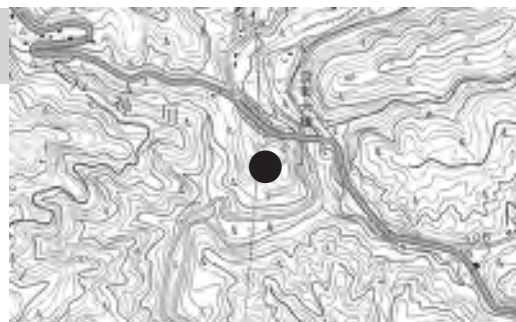
所在地 北設楽郡設楽町川向地内
(北緯35度6分33秒 東経137度33分58秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年10月～12月

調査面積 2,080㎡

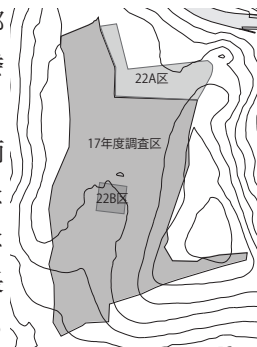
担当者 永井宏幸・社本有弥



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は、設楽ダムに伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

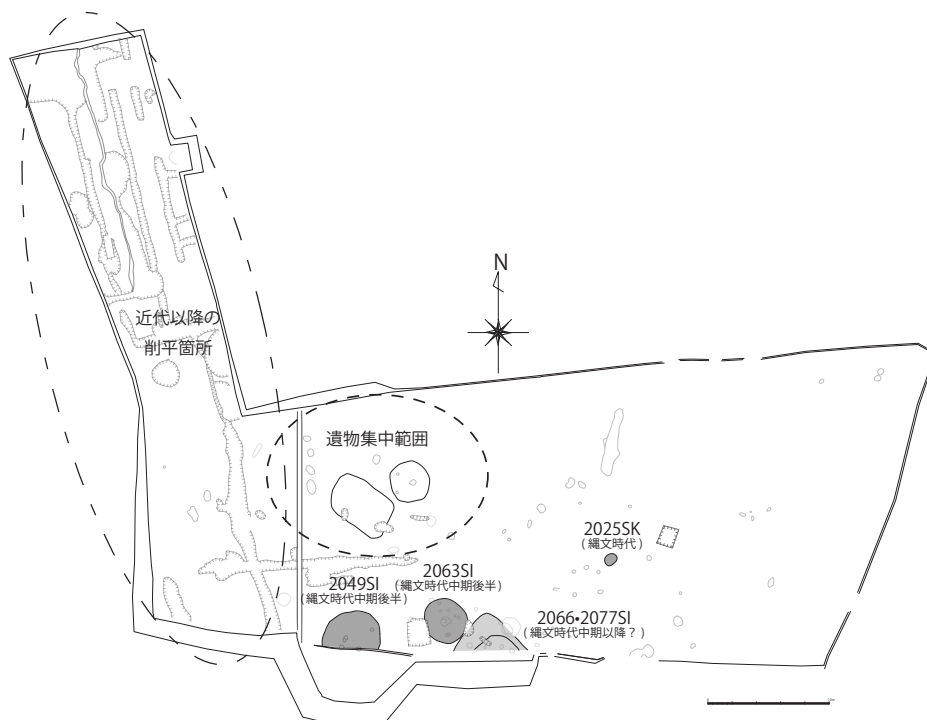
立地と環境 大畑遺跡は、境川と戸神川の合流点北東側に位置している。両河川は遺跡を挟んで標高 約370mの谷底を流れているが、遺跡はそこから崖や急斜面で隔てられた山地の頂部に所在し、標高は430～446mである。その頂部には、東西2か所に南北方向に細長い平坦面を有する尾根があり、それらにはさまれて南側へ抜ける谷地形が存在する。



大畑遺跡全体図

調査の概要 今年度調査は前回調査した調査区から北東に延長した箇所を22A区、前回調査ができなかった鉄塔の跡地を22B区として調査を開始した。

基本層序は、表土、黒色土層、褐色土層、褐色～黄褐色土層の漸移層、黄褐色土層が確認されている。また22A区西部では褐色～黄褐色土層の漸移層より上が現代の開墾等のため削平・盛土されていた。



22A区全体図 (1/625)

2 2 A 区 22A区は東西から調査区中央北に向かって落ちる谷地形となっている。調査区東の傾斜が急な箇所には遺構・遺物は展開せず、調査区中央の緩斜面地に展開していることがわかった。遺構としては竪穴建物跡4棟、陥し穴1基を確認している。

竪穴建物跡はどちらも円形で2049SIは柱穴と思われる箇所はあるが、炉に比定されるものは確認できていない。2063SIでは柱穴2基と炉跡が確認された。時期は縄文時代中期後半と考えられ、前回調査の集落の一部と見て良いだろう。2066・2075SIは角丸方形竪穴建物跡の一部と考えられる。炉跡は確認できなかったが、柱穴と思われる遺構が伴っている。特に2075SIには壁際に排水のための溝が掘られていたようである。縄文時代の遺構と考えられるが、時期を表す遺物が伴っていない。陥し穴は調査区中央東の斜面地で検出した。長径約1m、深さ70cmほどで、中央に杭を刺していた穴が見つかった。平成29年度調査で見つかった陥し穴と一連と考えて良いだろう。

また調査区中央に剥片を中心として、石器が集中して出土する箇所が確認されている。剥片が多くを占めているが石核や折損した石鏃、未製品などが出土しており、石器の捨て場のような場所であったと考えられる。

2 2 B 区 22B区は調査区西で検出した谷底に向かって東から緩やかに下がっている。谷底に近いから遺構・遺物の数が少ない。遺構は貯蔵穴1基と土坑1基であった。

貯蔵穴は谷底で検出され、長径約1.7m、深さ約1mと比較的大きい。埋土の堆積状況から何度か掘り返されていることから貯蔵穴と考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明。どんぐり等の種子の類も確認されていない。土坑は長径1.5m、深さ10cmと浅い土坑であるが、埋土から縄文時代早期末から前期初頭ごろの土器片が纏まって出土している。

(社本有弥)



22A 区竪穴建物跡周辺



22B 区貯蔵穴完掘状況

おおさき
大崎遺跡 (本発掘調査B)

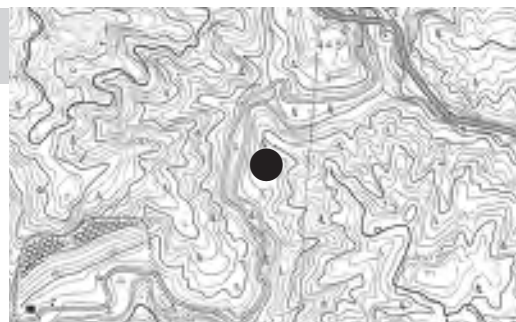
所在地 北設楽郡設楽町田口字大崎
(北緯35度06分22秒 東経137度33分50秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年5月～10月

調査面積 2,985㎡

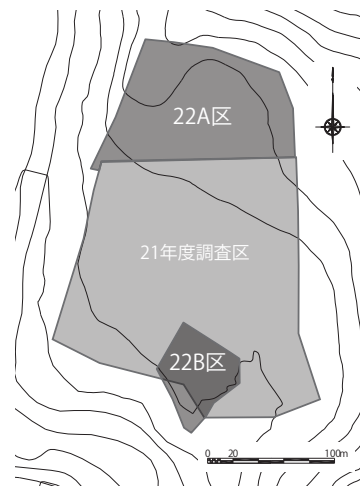
担当者 永井宏幸・川添和暁・社本有弥



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。

立地と環境 遺跡は境川東岸、河岸段丘状の緩斜面地上に立地する。当地は現在の田口集落西にある丘陵尾根が境川に向かって伸びる末端付近に当たり、遺跡の北と東には丘陵尾根が迫っている。北東側はこれら尾根に挟まれた谷地形で、湧水などのためか、調査前までは湿潤な環境となっていた。遺跡範囲内は北東から南西方向への傾斜地で、遺跡中央付近で傾斜の変換点があり、傾斜角度がさらに緩やかとなり南側へと続く。



大崎遺跡全体図

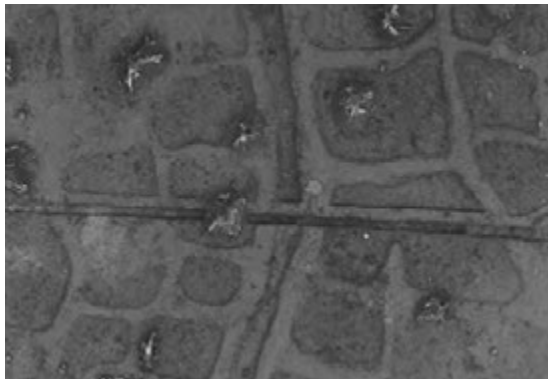
調査の概要 調査は前年度調査区の北側に22A区、前年度調査区の南に重複する形で22B区を設定、調査を行なった。層序は1層:表土、2層:灰黄褐色粘土層など、3層:ぶい黄褐色粘土・シルト層、4層:黒色粘土・シルト層、5層:明黄褐色粘土・シルト・砂・砂礫層となっている。今年度調査を行なった遺構・遺物は以下の通りとなっている。

時代・時期	検出・出土層	遺構(基数)	遺物
近世以降	表土	集石遺構(3)	陶器片
戦国期～近世	Ⅱ層中およびⅢ層上面	一部の水田関連遺構	陶器片
中世前半		水田関連遺構 [畦畔および水路]	山茶碗類【碗、小皿】、伊勢型鍋
古代		水田関連遺構か	灰釉陶器【碗、皿】
縄文時代中期～縄文時代後期	Ⅱ層下およびⅢ層上面	竪穴建物跡(11) 土坑(7)・包含層	縄文土器【深鉢等】、石器【石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー類、叩石、磨石等】
縄文時代早期以前	V層直上	土坑1基	剥片

2 2 A 区 22A区では積石・集石遺構、水田関連遺構、縄文時代早期の調査を行なった。

積石・集石遺構は4基を調査した。積石遺構は方形で約10m四方、高さ約50cm、集石遺構は楕円形で長径約1mであった。前年度調査では集石遺構を数基確認しており、何らかの信仰に関わる遺構もしくは水田造成時に礫を集積した場所と考えられる。

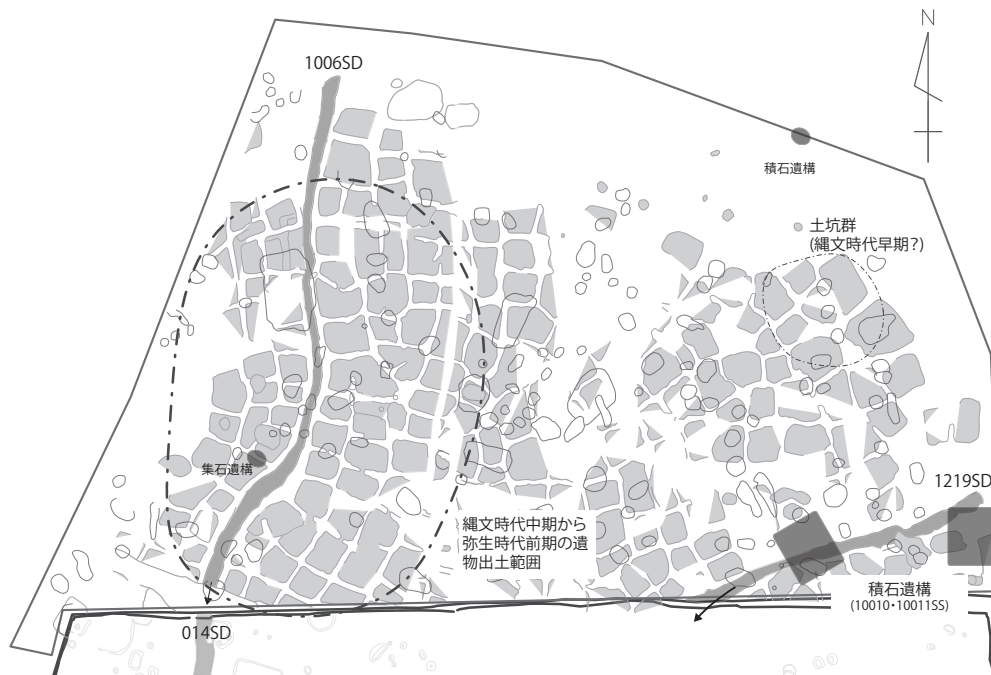
水田関連遺構は22A区の全域に展開している。畦畔、水路、畦畔内の耕作土で構成され、畦畔に囲われた区画は一辺約3～4mを主体とする小区画を呈する。今回の調査では、水路を二本確認した(1006SD・1219SD)。1006SDは調査区西部の北壁面付近から蛇行しながら西側に逸れ、前年度調査区の014SDにつながる。1219SDは調査区東壁付近から西へと伸び、おそらくこのまま昨年度の調査区へと繋がっていたと考えられる。そのため、本来の水田関連遺構は昨年度調査区を含め、ほぼ全域に展開していたことが想定される。畦畔を観察すると、一部で畦畔内に焼土塊が入っている箇所があり、畦畔を造る際に何らかの儀礼的な行為が行われたと考えられる。耕作土の中には、縄文時代・弥生時代・古代・中世までの幅広い時代の遺物が出土した。特に中世に当たる遺物としては山茶碗と伊勢型鍋を中心として古瀬戸や常滑の陶器片が出土しており、これらが水田関連遺構が使われていた時代の遺物と考えられる。



水田関連遺構



1006SD 土層断面



大崎遺跡 22A 区全体図 (1/250)

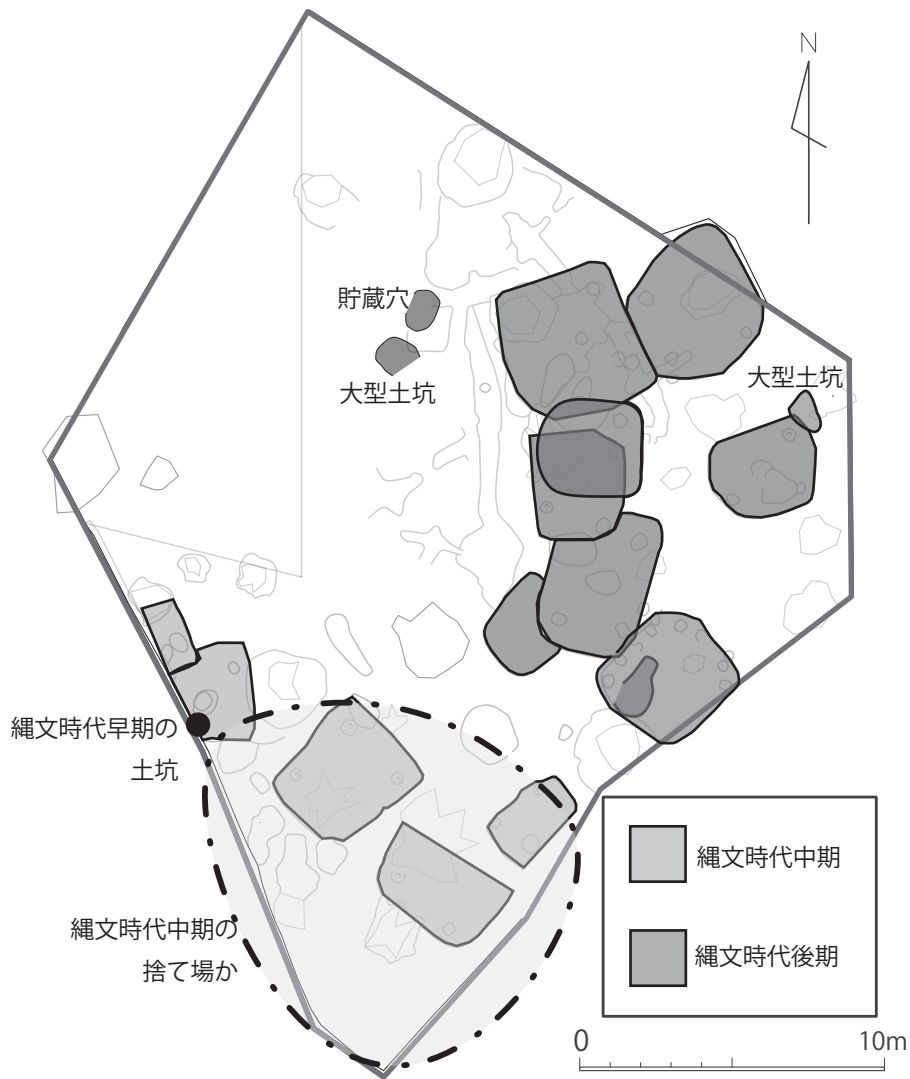
また、水田関連遺構の下面を調査したところ、斜面地では早期ごろの土坑が見つかり、表裏条痕土器や撚糸文土器の破片と安山岩製の剥片が散らばって出土している。

2 2 B 区 22B区では縄文時代中期から後期の遺構を調査した。

縄文時代中期の遺構は調査区の南西に展開していた。確認された遺構は竪穴建物跡3棟で、うち2棟は重複している(6015SI・6113SI)。重複している竪穴建物跡に注目すると、上の竪穴建物跡は正方形に近い隅丸方形で、石囲炉と思われる炉跡と柱穴が検出された。下の竪穴建物跡は隅丸でやや長方形を呈し、複数の柱穴と壁溝と思われる溝跡が検出された。

また、南端付近の傾斜地では遺物が広がって出土した。出土した遺物は縄文時代中期中葉から中期後半にかけてであり、土器を中心として、安山岩製の剥片や叩石・磨石などの礫石器が出土している。川へ落ちていく地形ということから、おそらく使えなくなった土器や石器の捨て場であったと考えられる。

縄文時代後期の遺構は、22B区の北東部に展開していた。確認された遺構は竪穴建物跡



大崎遺跡 22B 区全体図 (1/100)

7棟、大型土坑4基であった。特に調査区中央付近の竪穴建物跡は4棟の竪穴建物跡が重複していた。竪穴建物跡は約3～4m四方の隅丸方形を主体とするが、円形の竪穴建物跡も見つかっている。特に6052SIは土器敷戸が作られた痕跡が見つかっている。出土遺物としては、土器片や石器が出土、特に縄文時代後期中葉ごろの土器片が遺構内から纏まって出土している。

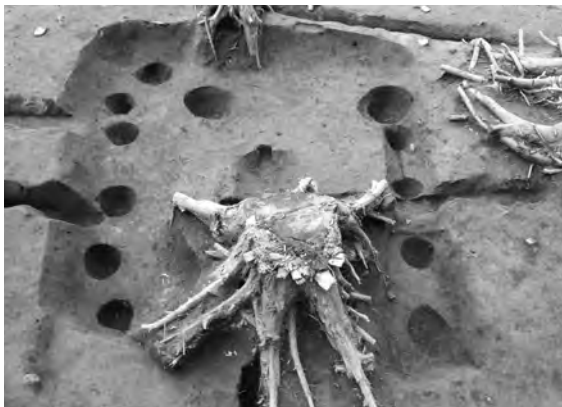
縄文時代早期 22B区では土器が纏まって出土している。かなり崩れてはいるが、横位で埋まっていたと考えられる。遺物は22B区の南で見つかっており、早期後半と思われる土器片が点々と出土している。今回の調査では竪穴建物跡が確認できなかったが、縄文時代早期後半以降に何らかの活動があったと考えられる。
(社本有弥)



22B 区縄文時代後期の竪穴建物跡群



22B 区縄文時代後期の土器 (八王子式か)



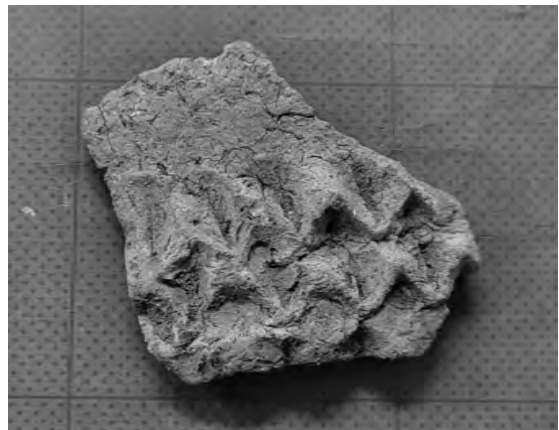
22B 区縄文時代中期後半の竪穴建物跡



22B 区縄文時代中期後半の土器



大崎遺跡 22B 区縄文時代早期土器出土状況



縄文時代前期の土器片 (入海式か)

かみをろう しもをろう
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡(本発掘調査B)

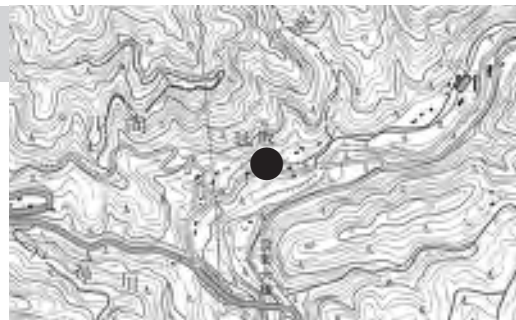
所在地 北設楽郡設楽町川向字上ヲロウ・下ヲロウ・中空
(北緯35度06分51秒 東経137度34分5秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和4年6月～7月

調査面積 340㎡

担当者 永井宏幸・川添和暁



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて、令和4年6月から7月にかけて実施した。今年度調査区22区は、県道432号小松田口線の北側、調査区20C区に接して遺跡範囲の北西端に340㎡で設定された。



調査区位置図

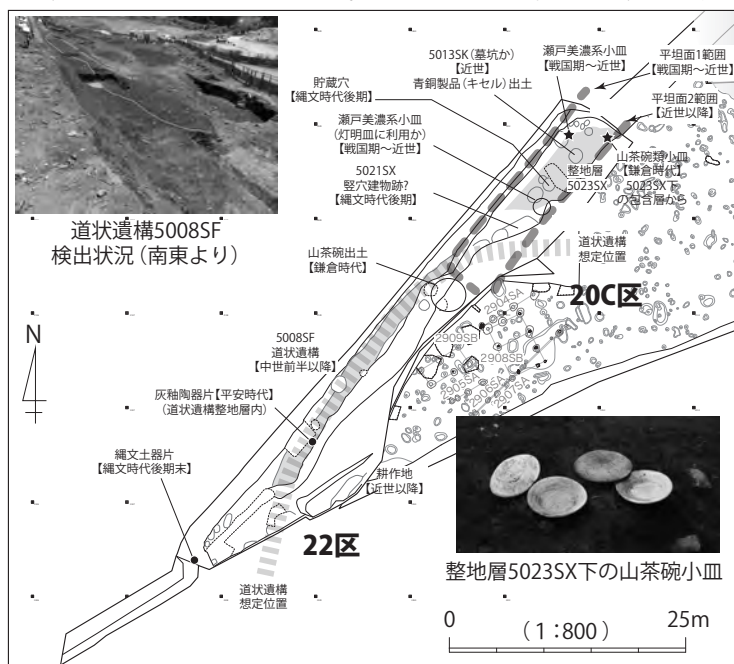
立地と環境 遺跡は、境川北岸の緩斜面上に立地する。当地には、斜面上方北側から幾筋もの沢が流れ込んで来ており、緩斜面は度重なる扇状地堆積(土石流堆積)の累積によって形成されている。今年度調査区の調査前の標高は、404～408mを測る。

調査の概要 調査成果は、以下の通りである。

時代・時期	遺構	遺物
縄文時代後期	竪穴建物跡?・貯蔵穴	縄文土器・石器(剥片)
古代～中世前半	道状遺構	灰釉陶器片・山茶碗類(碗・小皿)・土師鍋片
中世後半(戦国期)～近世前半	平坦面・整地層	瀬戸美濃系小皿など
近世	土坑(墓坑か)	青銅製品(キセル片)

集落への入り口となる道状遺構 特に注目される成果は、道状遺構が見つかったことである。道状遺構は、もともと浅い凹みの溝形状のところに、整地層が充填されていた。層には片麻岩礫のほか、炭化物粒や焼土が散在しており、灰釉陶器片や山茶碗・土師鍋片も出土した。この道状遺構は、北東側に昇るところで、戦国期から江戸時代の平坦面造成によって、途切れていた。当地は明治時代初期の地籍図や近世後半の村絵図にも、集落に入る道の存在が記載されており、今回の発掘調査でその存在が証明されたことになった。

(川添和暁)



2022年度調査区全体図

うちがいつばし
内貝津橋遺跡 (本発掘調査B)

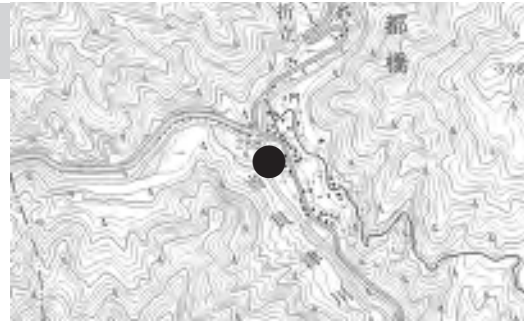
所在地 設楽町三都橋字内貝津地内
(北緯35度3分25秒 東経137度30分56秒)

調査理由 道路改築工事

調査期間 令和4年7月～10月

調査面積 920㎡

担当者 永井宏幸・鈴木恵介



調査地点 (1/2.5万「海老」)

調査の経過 調査は愛知県建設局道路建設課(新城設楽建設事務所)による道路改築工事に伴う事前調査として、愛知県埋蔵文化財センターが愛知県県民文化局を通じた委託事業として、令和4年7月から10月にかけて本発掘調査Bを実施した。

立地と環境 調査対象地の現況は旧耕作地である。表土掘削で近代の耕作土、床土を除去し、黄褐色中粒砂の基盤層上面で遺構検出を行なった。西側のA区では基盤層に径1mを超える巨岩が多数含まれており、上層の耕作土から遺物は出土するものの遺構の検出は困難であった。東側のB区では黄褐色の基盤層が安定する状況となり遺構の検出が可能となった。

調査の概要 調査面積は920㎡である。遺構検出面までの掘削深度は浅いところで0.5m、深いところでは1.3mであった。検出された遺構には、耕作溝、土坑、掘立柱建物跡092SB、柱列093SAがある。掘立柱建物跡092SBは1間×1間の掘立柱建物跡で、長軸(南北)3.1m、短軸(東西)2.9m。土坑025SKが中央に位置する。土坑025SKの上面には、被熱した炉跡091SLが検出された。他には027SK、039SKが092SB範囲内に入り、これらの土坑・炉跡は鍛冶関連遺構で、092SBはこれらを覆う目的で構築された可能性が考えられる。柱列093SAは中世以降の柱列で、調査区南半部で検出されたが、いずれも柱穴の川側(西側)に抜き取り痕跡が付属し、川側に倒れる状況下で撤去されたと見られる。(鈴木恵介)



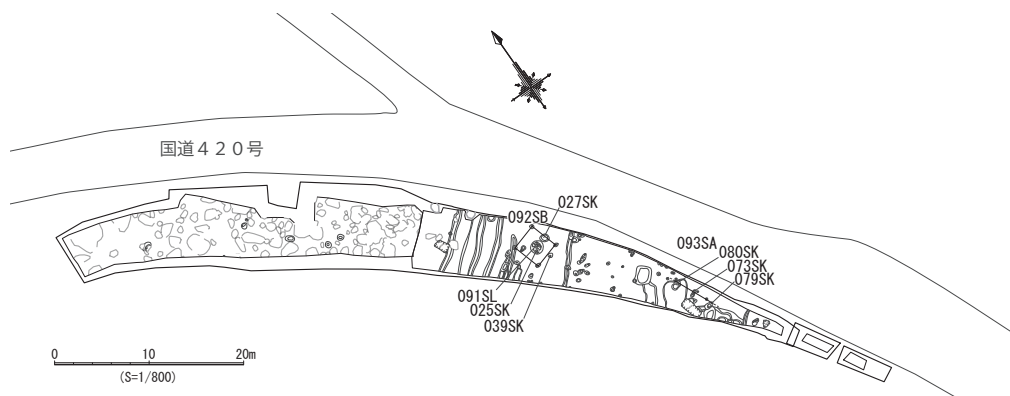
A区出土 石匙



B区 掘立柱建物跡092SB



B区 柱列093SA



内貝津橋遺跡 全体平面図 (S=1/800)

はなのきぎた

花の木北遺跡 (本発掘調査B)

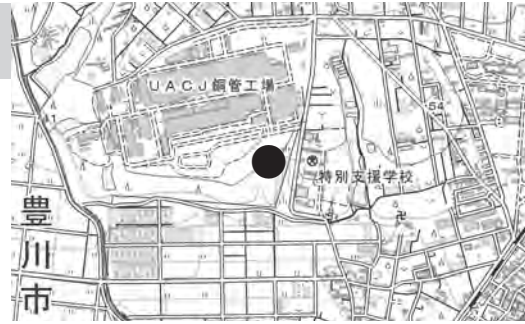
所在地 豊川市大木町新道
(北緯34度51分34秒 東経137度24分48秒)

調査理由 一般国道151号(一宮バイパス)

調査期間 令和4年10月～令和5年3月

調査面積 1355㎡

担当者 樋上昇・池本正明



調査地点 (1/2.5万「新城」)

調査の経過 調査は愛知県建設局道路建設課(東三河建設事務所)による一般国道151号(一宮バイパス)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。遺跡は令和元年度に実施した本発掘調査Aにおいて新たに確認されたもので、令和3年度には愛知県埋蔵文化財センターが2110㎡の本発掘調査Bを実施している。

立地と環境 遺跡は豊川市の北部で、平成18年に豊川市に合併した宝飯郡一宮町のエリアに該当する。地形的には西原大地と呼ばれる本宮山山麓から広がる扇状地の末端部分に所在する。周辺の遺跡を概観すると、小規模な谷を挟んだ南側には花の木古墳群・花の木遺跡が立地している。これらの遺跡は令和2年度に愛知県埋蔵文化財センターが本発掘調査Bを実施し、花の木遺跡は弥生時代中期～後期の集落遺跡、花の木古墳群は古墳時代中期前半を中心とする古墳群であることが確認されている。また、遺跡の東側には近接して宝陵高校遺跡、南東0.7km程度先には鎗水A遺跡などの弥生時代の遺跡が周知となっている。

調査の概要 本年度の調査区は令和3年度の調査区に接した北側に位置する。面積は1,130㎡、遺構検出面は北～南に向かう緩やかな斜面となっており、標高は50～49m程度となる。調査により検出できた遺構は、昨年度調査区から続く弥生時代中期と古墳時代中期の居住域となる。確認できた主な遺構は、竪穴建物・土坑・溝などがある。

次に遺構数に着眼すると、古墳時代中期の遺構が多く確認できた状況で、竪穴建物は昨年度南半分を調査した1棟と新たに検出した4棟が当該期に属する他、多数の土坑が検出されている。また、調査区の北東部分では幅約7m程度の溝が確認されている。東側は調査区外へと伸び、西側は攪乱により消失するが、端部は調査区内に存在していたものと考えられる。これに対し弥生時代中期の遺構は希薄で、昨年度南半分を調査した竪穴建物の他に、若干の土坑が確認できたのみとなる。

まとめ 本年度の調査区は昨年度調査区とほぼ同様の成果を得る事ができた。遺構の継続時期や内容から、小規模な谷を挟んだ南側に所在する花の木古墳群・花の木遺跡と有機的な関連性をもつものと考えられる。

弥生時代中期の遺構は希薄となる。分布状況からは今回の調査区が弥生時代中期の集落遺跡の北限となっている事が予測できる。一方、古墳時代中期の遺構は、遺構数も昨年度調査区より密度が濃い。こうした状況から、古墳時代中期の集落域は、平坦面がさらに続く北側へと広がるものと予測できる。(池本正明)



調査区 全景



遺構配置図 (1:500)

のぞえ
野添遺跡 (本発掘調査B)

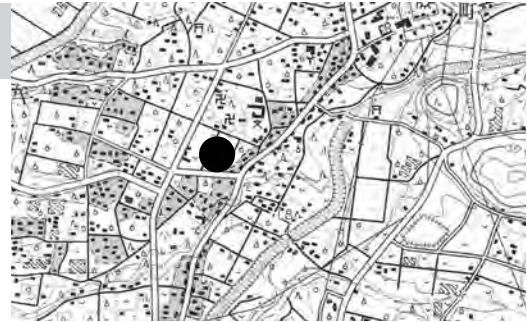
所在地 豊橋市石巻本町地内
(北緯34度47分55秒 東経137度26分15秒)

調査理由 道路改良工事 (交付金) 東三河環状線

調査期間 令和4年7月～令和5年1月

調査面積 4,055㎡

担当者 樋上 昇・池本正明・田中 良



調査地点 (1/2.5万「豊橋」)

調査の経過 調査は愛知県建設局道路建設課東三河東建設事務所による道路改良工事 (交付金) 東三河環状線に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。本遺跡は平成25年度に2,000㎡の調査がおこなわれた。今年度は、前回調査地点よりも高位の段丘上を4調査区に分け、22A区・22Ba区・22Bb区・22C区として調査を実施した。調査面積は4,055㎡である。

立地と環境 遺跡は豊川左岸の河岸段丘の縁辺部に立地し、東側には神田川沿いの低地がある。調査地点は、河岸段丘上に位置し、平成25年度調査地点は低地および段丘崖にあたる。遺跡の周辺には、神田川沿いの低地に弥生時代中期から後期、中世を主体とする東下地遺跡がある。

調査の概要 調査は、西側の22C区から東へ順に開始した。現在は、耕作地であり、遺物包含層が残っていないため、地山であるシルト層の上面で遺構検出をおこなった。その結果、区画溝と掘立柱建物跡からなる区画が、計4箇所検出された。また、掘立柱建物跡は8棟確認された。出土遺物には、大量の内耳鍋片や土師皿などの土師器、天目茶碗などの陶器片、磁器片、鉄滓などがあり、時期は16世紀～17世紀前半が主体となる。中には、須恵器や山茶碗など一部古い時期の遺物もある。さらには、縄文時代まで遡る石器も出土している。

2 2 C 区 22C区では、16世紀から17世紀前半の区画溝と掘立柱建物跡からなる区画が、調査区北側と南側の2箇所から検出された。調査区中央では、東西方向に伸びる区画溝が検出され、こちらは前述の区画とは時期が異なると考えられ、近世の区画溝の可能性はある。

南側の区画は、148SD・160SDの区画溝と掘立柱建物跡02・03の組み合わせからなる。また、柱穴は布掘り状の掘り方をもつ。掘立柱建物跡01は、上記の区画より新しいもので、一部の柱穴は区画溝の上から掘り込まれている。

北側の区画は、123SD・231SDの区画溝と掘立柱建物跡04の組み合わせからなる。この区画は、他にも柱穴が複数あり、別の掘立柱建物跡もあると考えられるが、調査区外にも一部柱穴が伸びるため、現状では組めていない。

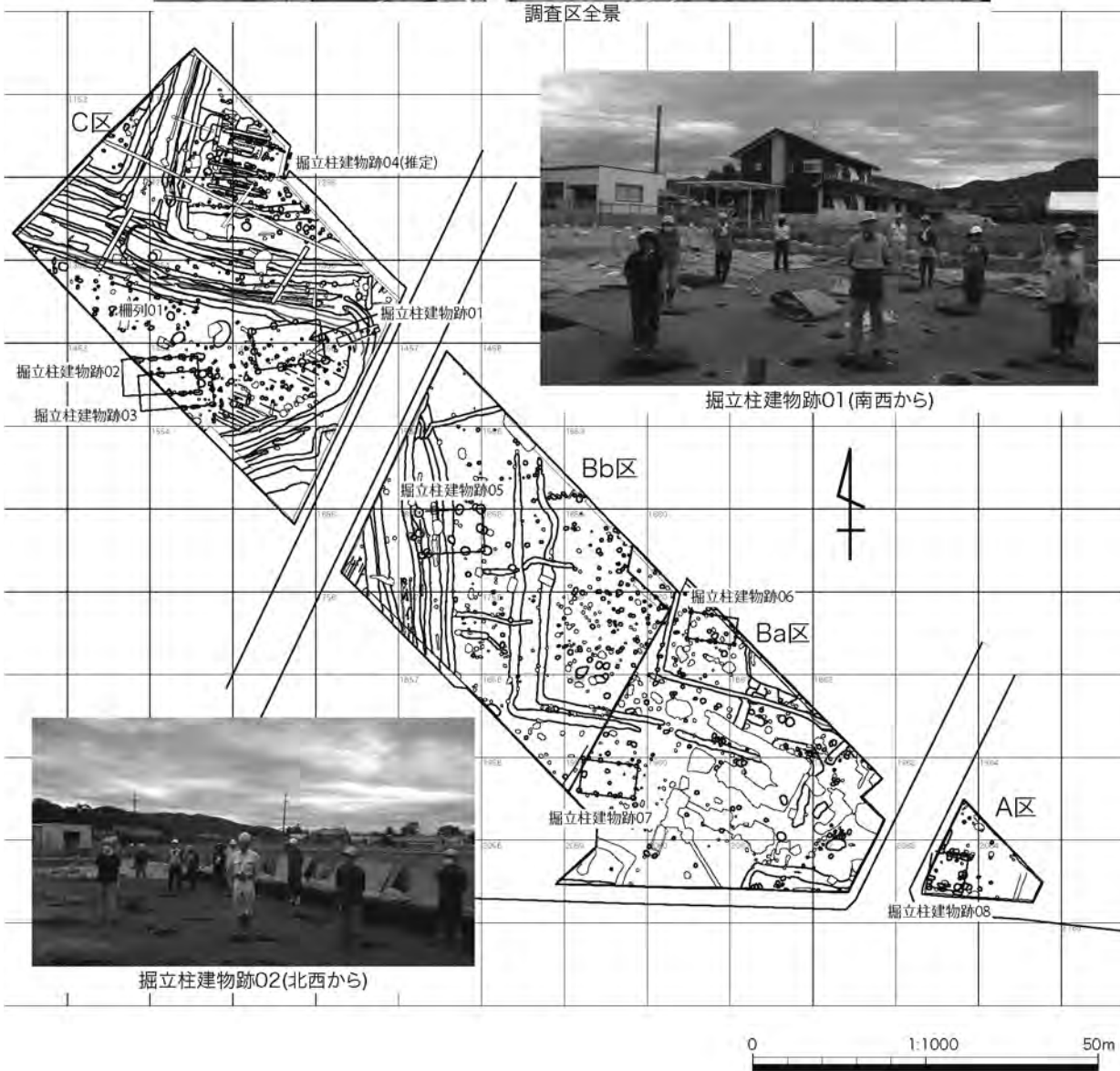
1 5 3 S D 153SDは、区画溝148SDより新しい溝で、調査区よりも南西にまっすぐ伸びると考えられる。この溝からは、志野焼の碗が出土していることから、17世紀前半以降と考えられる。

1 4 8 S D 148SDは、南側を区画する区画溝で、幾度となく掘り返されている。東側が新しく掘り返されており、遺物の出土が少なく、西側では内耳鍋片を主体とする遺物が多く出土している。時期は、16世紀から17世紀前半と考えられる。

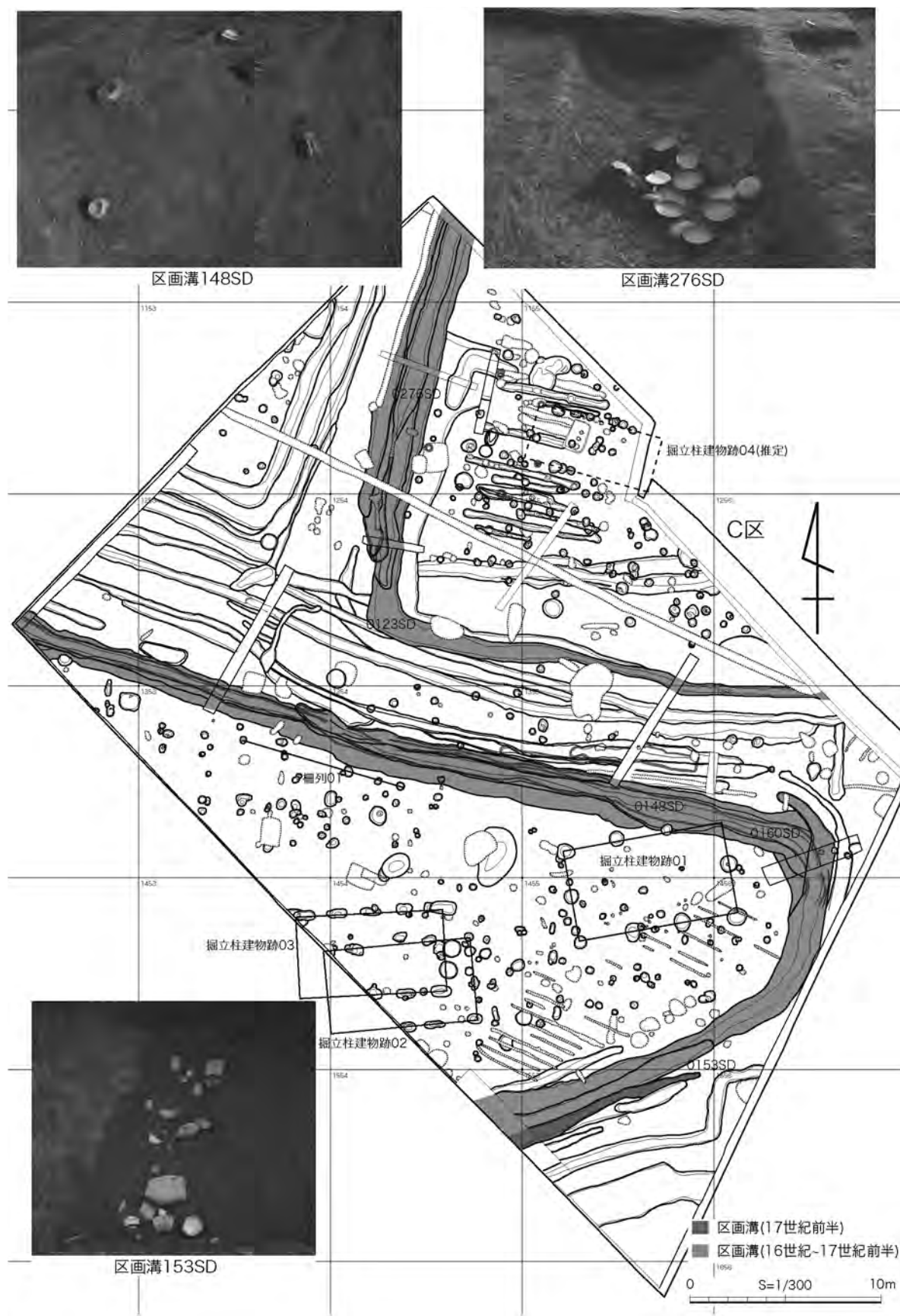
2 7 6 S D 276SDは、区画溝123SDより新しい溝で、さらに北側へ伸びると考えられる。この溝からは、大形の土師器皿12枚と小皿1枚が狭い範囲からまとまって出土している。時期は16世紀前半であり、南側の区画溝よりはやや古い可能性がある。



調査区全景



野添遺跡遺構全体図 (S=1/1000)



野添遺跡 C 区の遺構全体図 (S=1/300)

2 2 B b 区 Bb区は、調査区北側にBb区まで伸びる区画溝が併行して2条検出され、調査区西側では掘立柱建物跡05が検出された。調査区西側では、C区方向へ伸びる区画溝も確認されるが、現道下で屈曲すると考えられる溝もある。掘立柱建物跡05は、区画溝を壊して柱穴が構築されているものもあるため、17世紀前半よりも新しいと考えられる。

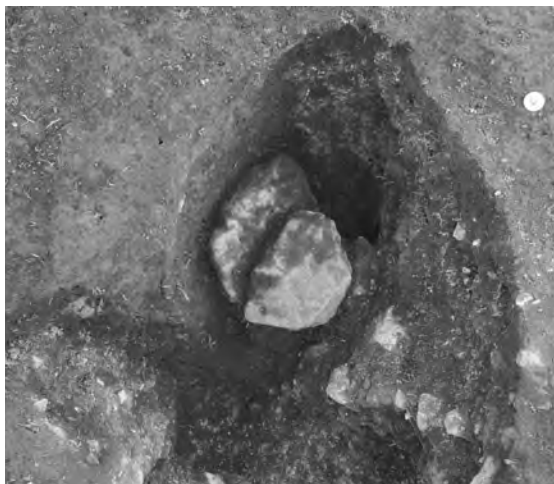
2 2 B a 区 Ba区は、調査区北側で区画溝と掘立柱建物跡06からなる区画が検出された。この区画の区画溝は、断面形状がV字状となり、柵列を伴うと考えられる柱穴が複数検出されている。調査区南西側では、掘立柱建物跡07が検出され、周辺に区画溝がないことから、掘立柱建物跡05と同様、区画よりも新しい時期の遺構と考えられる。

また、調査区南側では、山茶碗が2枚重なって出土した土坑801SKが検出された。中世まで遡る遺構は、今回の調査ではこの事例のみである。

2 2 A 区 A区では、調査区南西側で根石を伴う掘立柱建物跡08が検出された。時期は、掘立柱建物跡05や掘立柱建物跡07と同じように、区画溝を伴わないことと、根石をもつ柱穴で構成されることから、17世紀前半以降と考えられる。また、調査区東側に遺構が全くないことと、東側は低地に向かって急激に傾斜していることから、この調査区はちょうど集落の縁辺部にあたる可能性が高い。

ま と め 今回の調査では、16世紀から17世紀前半の集落が検出された。特に22C区では、北と南に2区画検出され、区画溝や柱穴からは16世紀から17世紀前半にかけての陶器や磁器、内耳鍋などの土師器が出土している。これらの出土遺物から、地方領主の屋敷地であったと推察される。『八名郡史』には、「徳川家康の時代に、吉田城領主から寺領を寄進される」との記載があり、遺跡の北側には臨済宗長谷寺があることから、この寺院に関連する遺構である可能性が考えられる。また、Ba区では801SKが検出され、区画溝の埋土などからも山茶碗片が出土しているため、中世まで集落の痕跡が遡れることが判明した。

平成25年度調査区とは、異なる時代の遺構が検出されたが、出土遺物には古代以前の遺物も含まれるため、今回の調査区にも古代以前の遺構があったと考えられるが、16世紀以降の造成により、遺構としては残っていなかったと考えられる。 (田中 良)



掘立柱建物跡 08 根石を伴う柱穴



山茶碗を伴う土坑 801SK

よしだじょうし あくみ
吉田城址・飽海遺跡 (本発掘調査B)

所在地 豊橋市今橋町6番地地内
(北緯34度46分12秒 東経137度23分59秒)

調査理由 愛知県東三河建設事務所改修工事(発電機棟等建設)

調査期間 令和4年12月

調査面積 100㎡

担当者 樋上 昇・蔭山誠一



調査地点 (1/2.5万「豊橋」)

調査の経過 本遺跡の調査は、愛知県東三河建設事務所改修工事（発電機棟等建設）にともなう事前調査として、愛知県建築局公共建築部公共建築課より愛知県県民文化局を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、令和4年12月に調査を実施した。調査区は愛知県東三河建設事務所の北側にある。調査面積は100㎡で、北側を22A区、南側を22B区、中央の東側を22C区に分けて調査した。

立地と環境 吉田城址・飽海遺跡は豊橋市中央部にある豊川の左岸河岸段丘上にある遺跡で、今回の発掘調査地点は吉田城址の北東側にある外堀が通る地点にあたる。また調査地点は縄文時代から中世にかけての飽海遺跡とも重複している。

調査の概要 今回の調査では、鎌倉時代と江戸時代の主に2時期の遺構と出土遺物が確認できた。

鎌倉時代では、柱穴と思われる土坑18基を確認することができた。土坑は径10cm～35cmの平面円形状のもので、007SKより焼き締め陶器の甕が出土した。

江戸時代では、溝3条を確認することができた。001SDは22A区から22C区の西側にて確認された吉田城址の外堀の東肩部分にあたる。002SDと019SDは22B区から22C区の南側から22Bに確認された溝である。これらの遺構からは、江戸時代後期から近代にかけての陶磁器などが出土した。

(蔭山誠一)



22区全景 (東上空より)



22B区SK007 (北東より)

III. 刊行報告書抄録

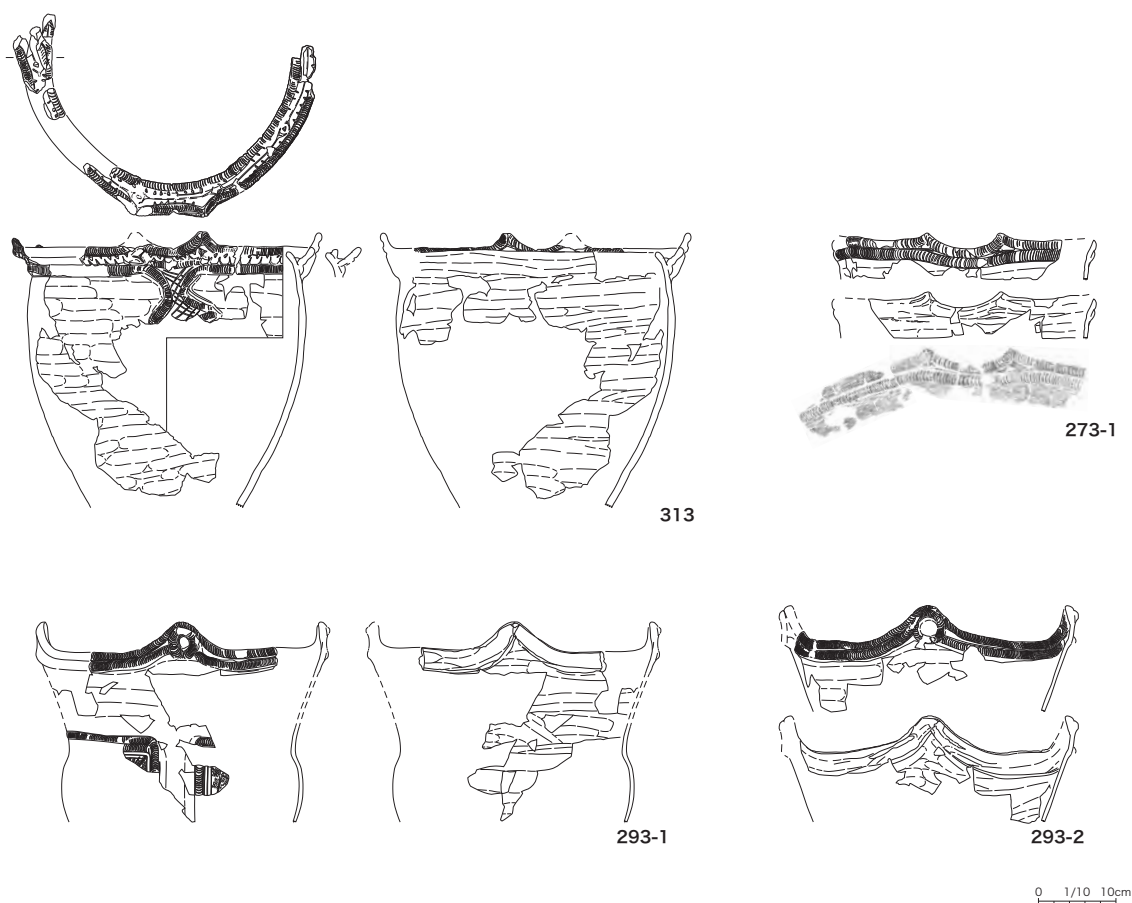
第217集 石原遺跡

石原遺跡は、境川右岸の沖積地上に立地し、縄文時代早期中葉の土坑群、縄文時代中期前葉の竪穴建物跡2棟、遺物集中地点、土坑群、縄文時代後期末から弥生時代前期にかけての良好な遺物包含層、配石墓などが確認された。

縄文時代中期前葉の竪穴建物跡は、石囲炉をもつ竪穴建物跡と間層を挟んで上層から、さらに竪穴建物跡が検出され、その上から土坑群が構築されるなど著しい重複をみせる。また、竪穴建物跡が検出された場所よりも西側では、遺物集中地点が数カ所あり、そこから縄文時代中期前葉の北裏CⅡ式期の土器が3個体復元された。

縄文時代後期末から弥生時代前期にかけての良好な遺物包含層は、長軸約20m、短軸約15mの谷地形の埋土から検出され、大量の土器片が出土している。中でも、縄文時代晚期後葉の突帯文土器が大半を占め、配石墓や集石遺構が谷の埋土中に構築される。出土土器の多くに炭化物が付着していることと、集石遺構に一部焼けた礫が含まれていることから、この場所で煮炊きを集中的におこなっていた可能性が考えられる。

石原遺跡の調査成果は、各調査区によって時期が異なる遺構が検出されたため、縄文時代の集落の移り変わりを解明する手がかりとなった。特に、縄文時代中期前葉の集落は、設楽町のみならず、県内でも数少ない貴重な事例となり、東海地方の中期前葉を解明する手がかりとなるであろう。 (田中 良)



石原遺跡 縄文時代中期前葉北裏CⅡ式土器群

報告書抄録

ふりがな	いしはらいせき
書 名	石原遺跡
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 217 集
編著者名	田中 良・永井 邦仁・鬼頭 剛ほか
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2023 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしはらいせき 石原遺跡	あいちけんきたしたらぐん 愛知県北設楽郡 したらちようかわむき 設楽町川向	23561	700170	35 度 6 分 55 秒	137 度 34 分 22 秒	2018.5 ∩ 2018.12 2019.5 ∩ 2019.11	13,850	設楽ダム

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石原遺跡	集落跡	縄文時代早期	遺物包含層、土坑	縄文土器、石器	縄文時代早期の包含層が層位的に検出
		縄文時代中期	竪穴建物跡 2 棟	縄文土器、石器	石囲炉を有する竪穴建物
		縄文時代晩期	遺物包含層、配石基 1 基、集石遺構	縄文土器、石器	良好な遺物包含層と配石墓

文書番号	発掘届出：埋文（30 埋セ第 2 号 /31 埋セ第 6 号） 発掘届出：県教委（30 教生第 282 号 /31 教生第 276 号） 完了報告（30 埋セ第 100 号 /31 埋セ第 97 号） 文化財認定（30 教生第 3517 号 /31 教生第 3530 号）
------	---

要 約	奥三河山間部の境川右岸の緩斜面に立地する縄文時代中期前葉と晩期の集落跡。縄文時代中期前葉は竪穴建物跡と遺物集中地点、縄文時代晩期は遺物包含層状の土器溜まり。また、配石墓と集石遺構がある。
-----	---

第219集 マサノ沢遺跡

マサノ沢遺跡の発掘調査は大きく二つの時期の成果を得た。

一つは縄文時代後期を中心とする配石墓・集石墓などの墓地関連遺構である。土壙および周辺から岩偶・岩版類をはじめとする「第2の道具」、人骨・獣骨の焼骨片が出土している。なかでもハート形土偶の出土は注目される。胴部のみではあるが、県内出土としては初例である。

もう一つは縄文時代晩期から弥生時代前期を中心とする6基の土器棺墓である。三河山間部の事例としてはまとまった土器棺墓群の初例となった。(永井宏幸)



縄文時代後期集石墓195SK出土状態



195SK出土遺物



縄文時代後期094SX内の配石墓



縄文時代後期ハート形土偶



弥生時代前期土器棺墓143SK出土状態



143SK出土遺物

報告書抄録

ふりがな		まさのさわいせき						
書名		マサノ沢遺跡						
副書名								
巻次								
シリーズ名		愛知県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第219集						
編著者名		永井宏幸、株式会社パレオラボ						
編集機関		公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター						
所在地		〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町字野方802-24 TEL0567(67)4161						
発行年		西暦2023年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
まさのさわいせき マサノ沢遺跡	あいちけんきたしたらぐんしたちよう 愛知県北設楽郡設楽町 おおあざこまつまさのさわ 大字小松マサノサワ	23561	700172	35度 07分 04秒	137度 34分 35秒	2017.7.～ 2018.2.	2,050㎡	設楽ダム
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
マサノ沢遺跡	集落・墓地	縄文時代	集石遺構・配石遺構・ 土坑・柱穴		土器・石器・獣骨・人骨		ハート形土偶・岩偶岩版類 ・石棒	
	集落・墓地	弥生時代	土器棺墓・土坑		土器・石器		土器棺墓	
文書番号	発掘届出		(29埋セ第15号・平成29年5月11日)					
	通知		(29埋セ第730号・平成29年5月25日)					
	終了届・保管証・発見届		(29埋セ第131号・平成30年2月23日)					
	監査結果通知		(29教生第3823号・平成30年3月7日)					
要約	マサノ沢遺跡の発掘調査は大きく二つの時期の成果を得た。 一つは縄文時代後期を中心とする配石墓・集石墓などの墓地関連遺構である。土壙および周辺からから岩偶・岩版類をはじめとする「第2の道具」、人骨・獣骨の焼骨片が出土している。なかでもハート形土偶の出土は注目される。胴部のみではあるが、県内出土としては初例である。 もう一つは縄文時代晩期から弥生時代前期を中心とする6基の土器棺墓である。三河山間部の事例としてはまとまった土器棺墓群の初例となった。							

第220集 一色城跡

一色城跡は、稲沢市西島町と片原一色町にまたがって所在する、戦国時代の城館遺構を中心とする複合遺跡である。城館遺構は江戸時代の絵図や地誌類に記される「片原一色城」に相当すると考えられる。片原一色城の城主は、『信長公記』に記される戦国大名織田信長の鉄砲の師匠であった橋本一巴とその家系であり、地誌類によると城主の転出などにより17世紀初頭に廃城となったとされている。発掘調査は令和元年～2年度、報告書作成のための室内調査等は令和3年度に行われた。発掘調査では、片原一色城の遺構・遺物とともに古墳時代前期～江戸時代の集落遺構と遺物が多数検出されている。

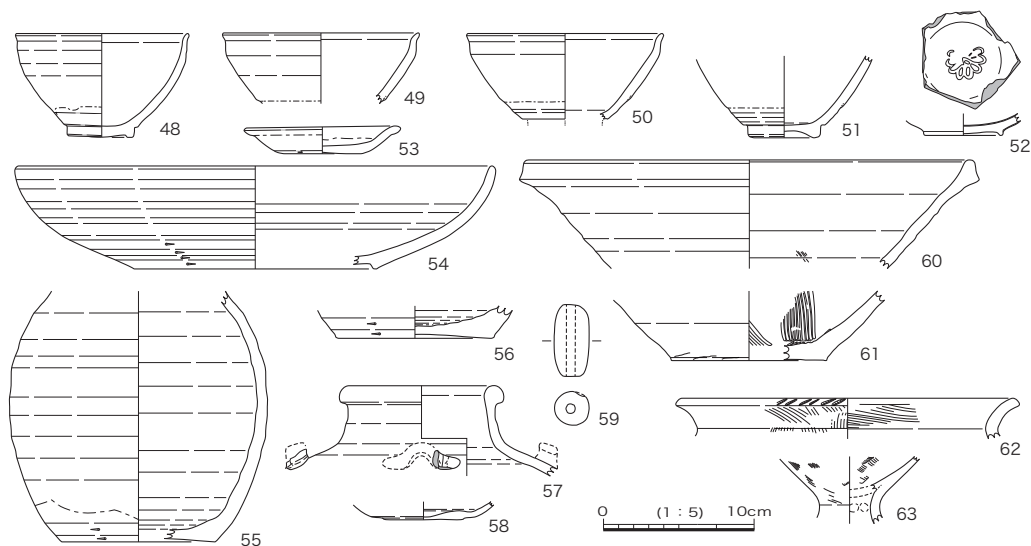
古墳時代前期は微高地の縁辺に相当し、掘立柱建物がみられ、包含層から廃棄された甕類を中心とする土器類が出土している。その後古墳時代中期の活動痕跡は確認されていない。

次いで古墳時代後期特に7世紀後半に微高地縁辺に周回するような幅約1mの溝を掘るなど、竪穴建物を中心とする集落としての開発が再開される。同時に遺跡西部でも大型掘立柱建物の所在が認められる。当該期には直径10m未満の円形周溝もあり、壺蓋が出土することから墓の可能性もある。

しかし9～12世紀には再び活動痕跡が減少し、区画溝が廻る中世集落の景観がみられるのは14世紀である。集落域は古代に比べて拡大したと思われるが、おおむね微高地の南縁であることは変わらない。また、片原一色城はこれらの区画溝を埋め立てて築造されている。

片原一色城は、東・西・北堀の一部が検出されたことから、一辺が1町(約109m)の方形単郭の構造であったと推測される。残存部での東堀は幅約13m、西堀は幅約8mを測り、断面が逆台形の大溝状である。堀の内側には溝が廻り、両者間は土塁であったと推測される。溝からは15世紀後葉～16世紀前半の陶器類や茶臼、焼けた建築部材が出土しており、これらは廃城時に捨てられたものと推測される。

江戸時代には、堀跡を改変して東西方向の大溝が掘削されている。その位置はちょうど西島村と片原一色村の境界に当たることから、大溝は村境を視覚化するために掘られたものと考えられる。(永井邦仁)



一色城主郭内の溝20A区056SD出土の土器・陶器類

報告書抄録

報告書抄録

ふりがな		いっしきじょうあと						
書 名		一色城跡						
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名		愛知県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第220集						
編著者名		永井邦仁、鬼頭剛、小林克也、株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループ						
編集機関		公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター						
所在地		〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567(67)4161						
発行年月日		西暦 2023年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いっしきじょうあと 一色城跡	あいちけん いなざわし 愛知県稲沢市 にしじまちょう 西島町・ かたはらいっしきちょう 片原一色町	23220	090029	35度 15分 00秒	136度 44分 55秒	2019.6.24～ 2019.12.27 2020.11.4～ 2021.3.3	2,500 1,350	県道給父 稲沢線 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
一色城跡	集落	弥生時代後期、 古墳時代前・後期、 奈良時代、 鎌倉時代、 室町時代、 戦国時代、 江戸時代	掘立柱建物跡、 竪穴建物跡、溝、 井戸、古墓、堀、 布掘り掘立柱建物、 大溝		弥生土器、土師器、 須恵器、灰釉陶器、 山茶碗、内耳鍋、 瀬戸・美濃窯産陶器、 白磁、木製品、漆椀、 茶臼、砥石、墨書土器、 製塩土器、美濃刻印須恵器		7世紀大型掘立柱建物、 奈良時代の古墓、 片原一色城の堀、	
文書番号		発掘届出(埋セ31第9号・2019.4.26、埋セ2第99号・2020.10.1) 通知(31教生第688号・2019.5.28、2文芸第2073号・2020.10.8) 終了届・保管証・発見届(31埋セ第106号・2019.12.27、埋セ2第153号・2021.3.3) 鑑定結果通知(31教生4029号・2020.3.17、2文芸第3830号・2021.3.26)						
要約	本遺跡は、稲沢市西部の日光川左岸に立地する戦国時代の城館遺跡を中心とする古墳時代から江戸時代までの集落遺跡からなる複合遺跡である。遺跡は自然堤防の微高地南端に立地し、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落の形成が始まる。その後、古墳時代後期から奈良時代にかけて竪穴建物や一部に布掘り掘立柱建物を含む古代集落が営まれる。当該集落域内には直径約6mの周溝状遺構があり、奈良時代初頭の古墓と考えられる。また大型掘立柱建物の一部も検出されている。一方、平安時代の集落は低調だが、鎌倉・室町時代には区画溝のめぐる屋敷地群となっている。しかしながら15世紀代には屋敷地群を造成して一辺約109mの方形単郭の城館が構築される。発掘調査では東・北・西堀および土塁内側の内堀が確認され、茶臼や漆椀、陶器類が出土している。当該城館は江戸時代地誌類にみえる片原一色城に相当し、廃城後に堀の一部を利用して西島村と片原一色村の村境の溝が構築されている。							

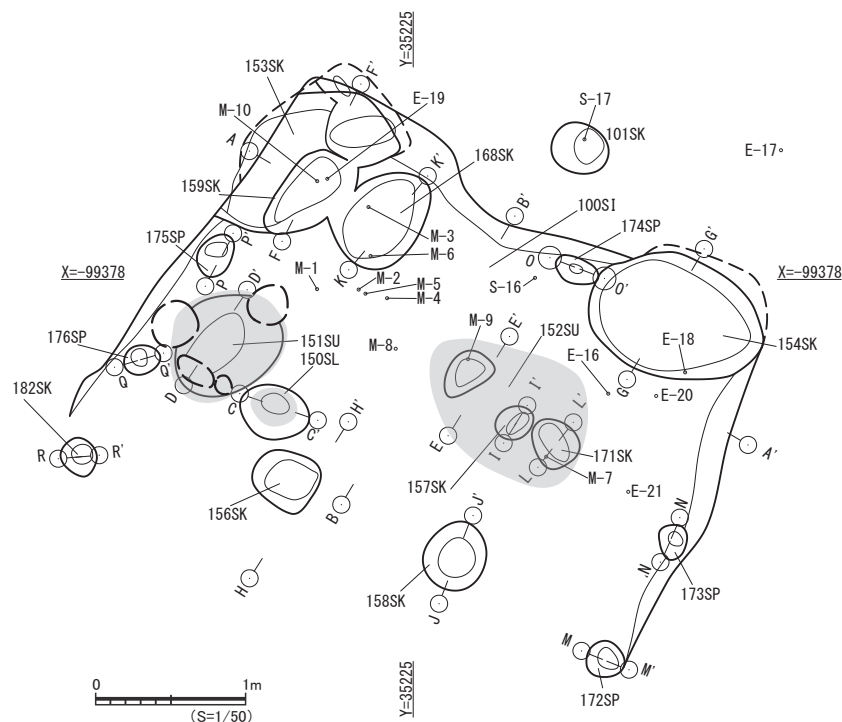
第221集 胡桃窪遺跡・大名倉丸山遺跡・添沢遺跡

胡桃窪遺跡：大名倉地区の寒狭川左岸段丘上に立地する縄文時代前期・中期の集落跡。縄文時代前期の竪穴建物跡1棟、縄文時代中期の竪穴建物跡2棟が検出され、縄文時代前期の竪穴建物跡は設楽ダム関連遺跡の中でも希少である。平安時代中頃に鍛冶を行っていた竪穴状遺構(100SI)からは鍛造剥片や粒状滓が検出された。

大名倉丸山遺跡：大名倉地区の寒狭川左岸丘陵上に立地する。調査範囲は近世以降の鍛冶作業場の近隣に該当する。鍛冶遺構そのものは未検出であるが、鍛冶滓である鉄滓が多く出土した。

添沢遺跡：田口地区に位置し、境川に注ぐ小河川である小松川の右岸河岸段丘上に立地する。縄文時代早期～中世の幅広い時代の遺物が出土した。明確な時期は不明だが、鍛冶に伴う鉄滓も包含されていた。遺物の内、多くは自然流路400NR等に包含されていたものである。

今回掲載の3遺跡では鍛冶関連遺物が出土している。設楽ダム関連遺跡では、鍛冶に関わる鉄滓などは多くの遺跡で検出されているが、明確に古代～中世の鍛冶遺構が検出されたものは、胡桃窪遺跡の他には西地・東地遺跡など数遺跡にとどまる。遺構の残存状況にも左右されるが、設楽ダム関連遺跡周辺には、このような鍛冶関連遺構が多数存在したことが想定される。本報告では、このような平安時代の竪穴状遺構についても詳細に報告している。
(鈴木恵介)



胡桃窪遺跡 平安時代の竪穴状遺構100SI

報告書抄録

ふりがな	くるみくばいせき・おおなぐらまるやまいせき・そえざわいせき							
書 名	胡桃窪遺跡・大名倉丸山遺跡・添沢遺跡							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第 221 集							
編著者名	鈴木恵介・武部真木・河嶋優輝・伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹 Zaur Lomtadize・小林克也							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2023 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くるみくばいせき 胡桃窪遺跡	きたしたらぐんしたらちよう 北設楽郡設楽町 おおなぐらあざくるみくば・まるやま 大名倉字胡桃窪・丸山	23561	700158	35 度 6 分 13 秒	137 度 33 分 10 秒	2020.5 ＼ 2020.10	2,825	設楽ダム
おおなぐらまるやまいせき 大名倉丸山遺跡	きたしたらぐんしたらちよう 北設楽郡設楽町 おおなぐらあざまるやま 大名倉字丸山		700347	35 度 5 分 59 秒	137 度 33 分 7 秒	2015.10 ＼ 2015.11	450	
そえざわいせき 添沢遺跡	きたしたらぐんしたらちよう 北設楽郡設楽町 たぐちあざそえざわ 田口字添沢		700188	35 度 6 分 24 秒	137 度 34 分 23 秒	2020.6 ＼ 2020.11	1,769	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
胡桃窪遺跡	集落跡	縄文時代前期～ 縄文時代中期 平安時代中頃	竪穴建物跡 3 棟 竪穴状遺構 2 棟、炉跡		縄文土器、石器 灰釉陶器、鍛造剥片、粒状滓		希少な縄文時代前期の 竪穴建物跡や平安時代の 炉跡を伴う竪穴状遺構	
大名倉丸山遺跡	生産遺跡	近世～近代	土坑、遺物包含層		鉄製品、鉄滓、砥石		鍛冶滓が多く検出されたが 鍛冶に伴う遺構は未検出	
添沢遺跡	遺物散布地	縄文時代早期 ＼ 中世	自然流路、遺物包含層		縄文土器、石器 灰釉陶器、山茶碗、鉄製品 鉄滓		幅広い年代の遺物が検出 されるが、二次堆積による	
文書番号	発掘届出：埋文（胡桃窪遺跡：2 埋セ第 4 号・2020.4.2） （大名倉丸山遺跡：27 埋セ第 63 号・2015.8.26）（添沢遺跡：2 埋セ第 6 号・2020.4.2） 発掘届出：県教委（胡桃窪遺跡：2 文芸第 326 号・2020.5.14） （大名倉丸山遺跡：27 教生第 1500 号・2015.9.8）（添沢遺跡：2 文芸第 328 号・2020.5.14） 完了報告（胡桃窪遺跡：2 埋セ第 115 号・2020.10.30） （大名倉丸山：27 埋セ第 91 号・2015.11.24）（添沢遺跡：2 埋セ第 113 号・2020.10.30） 文化財認定（胡桃窪遺跡：2 文芸第 2453 号・2020.11.12） （大名倉丸山：27 教生第 2287 号・2015.12.07）（添沢遺跡：2 文芸第 2452 号・2020.11.12）							
要 約	胡桃窪遺跡：寒狭川左岸段丘上に立地する縄文時代前期・中期の集落跡。縄文時代前期の竪穴建物跡は希少。平安時代中頃の鍛冶を行った竪穴状遺構からは鍛造剥片や粒状滓が検出された。 大名倉丸山遺跡：寒狭川左岸丘陵上に立地する。調査範囲の近隣には近世以降の鍛冶作業場の存在が推定されている。鍛冶遺構そのものは未検出であるが、鍛冶滓である鉄滓が多く出土した。 添沢遺跡：境川に注ぐ小河川である小松川の右岸河岸段丘上に立地する。縄文時代早期～中世の幅広い時代の遺物が出土した。遺物の内、多くは自然流路 400NR 等に包含されていたものである。							

IV. 普及・公開活動の記録

埋蔵文化財展

愛知県埋蔵文化財センターでは、遺跡の発掘調査により発見された資料を広く公開するとともに、講座や体験プログラムなどの企画を通じて、県民の埋蔵文化財に対する理解を深め、文化財保護意識の向上を図ることを目的とした埋蔵文化財展を行っている。

2022年度は、春には愛知県埋蔵文化財調査センターと共催して新出土品展「やとみ新発見展"2022」と重要文化財の特別公開を行った。また、秋には『悠久の記憶～設楽ダム関連発掘調査成果展～』と題し、設楽町教育委員会、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所、愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室、愛知県埋蔵文化財調査センターと共催して設楽町奥三河郷土館で展示を行った。

春の埋蔵文化財展

- 1.会場 愛知県埋蔵文化財センター
- 2.会期 令和4年4月4日(月)~4月15日(金)まで
- 3.内容
 - 展示
 - 2階収蔵庫C
 - 「やとみ新発見展"2022」
 - 2022年に本発掘調査Bを実施した13遺跡の出土遺物と写真パネル等を展示した。
 - 「食と文化の考古学 煮炊きの道具の歴史」
 - 2階資料管理閲覧室
 - 「食と文化の考古学 石の道具の歴史」
 - 配布資料
 - 「埋文桜ニュース」
 - 遺跡の概要説明と本年度イベント案内及び同時開催の愛知県埋蔵文化財調査センター春の特別公開の展示解説を掲載した。
 - *期間中配布部数：105部

- 4.考古学縁日
 - 4月9日(土)・10日(日)に以下のワークショップを実施した。
 - 「城わなげ」
 - 愛知県の地図上に配置した、実在の城に擬似的に向かって輪投げを行ってもらい、その得点に応じて缶バッジを配布した。
 - *参加者数：75名
 - 「お宝記念撮影」
 - 撮影台を用意し、これまでに調査した遺跡の出土遺物の優品を数点設置して来場者に自由に撮影してもらった。
 - 「火起こしマスター」 *参加者数：34名
- 5.その他
 - 「やとみ新発見展"2022」開催中は、新型コロナウイルス感染症予防、緊急時の連絡及び入館者数把握のため、来館者にはアルコールによる手指の消毒と来館者カードへの記入を行ってもらった。
 - *期間中来場者数：159名 (河嶋優輝)

令和4年度 春の特別公開& 入場無料 やとみ新発見展⁰⁰2022

期間：令和4年4月4日(月)から4月15日(金) 開館時間：午前9時から午後4時まで



<<お問合せ先>>
愛知県埋蔵文化財調査センター 〒498-0017 弥富市前々須野方802-24 TEL: 0567-67-4164
公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 〒498-0017 弥富市前々須野方802-24 TEL: 0567-67-4163

▲春の埋文展 チラシ

埋文桜ニュース

2022年4月4日発行

1 埋文桜ニュース

2 埋文桜ニュース

3 埋文桜ニュース

4 埋文桜ニュース

5 埋文桜ニュース

6 埋文桜ニュース

7 埋文桜ニュース

8 埋文桜ニュース

9 埋文桜ニュース

10 埋文桜ニュース

11 埋文桜ニュース

12 埋文桜ニュース

13 埋文桜ニュース

14 埋文桜ニュース

15 埋文桜ニュース

16 埋文桜ニュース

17 埋文桜ニュース

18 埋文桜ニュース

19 埋文桜ニュース

20 埋文桜ニュース

21 埋文桜ニュース

22 埋文桜ニュース

23 埋文桜ニュース

24 埋文桜ニュース

25 埋文桜ニュース

26 埋文桜ニュース

27 埋文桜ニュース

28 埋文桜ニュース

29 埋文桜ニュース

30 埋文桜ニュース

31 埋文桜ニュース

32 埋文桜ニュース

33 埋文桜ニュース

34 埋文桜ニュース

35 埋文桜ニュース

36 埋文桜ニュース

37 埋文桜ニュース

38 埋文桜ニュース

39 埋文桜ニュース

40 埋文桜ニュース

41 埋文桜ニュース

42 埋文桜ニュース

43 埋文桜ニュース

44 埋文桜ニュース

45 埋文桜ニュース

46 埋文桜ニュース

47 埋文桜ニュース

48 埋文桜ニュース

49 埋文桜ニュース

50 埋文桜ニュース

51 埋文桜ニュース

52 埋文桜ニュース

53 埋文桜ニュース

54 埋文桜ニュース

55 埋文桜ニュース

56 埋文桜ニュース

57 埋文桜ニュース

58 埋文桜ニュース

59 埋文桜ニュース

60 埋文桜ニュース

61 埋文桜ニュース

62 埋文桜ニュース

63 埋文桜ニュース

64 埋文桜ニュース

65 埋文桜ニュース

66 埋文桜ニュース

67 埋文桜ニュース

68 埋文桜ニュース

69 埋文桜ニュース

70 埋文桜ニュース

71 埋文桜ニュース

72 埋文桜ニュース

73 埋文桜ニュース

74 埋文桜ニュース

75 埋文桜ニュース

76 埋文桜ニュース

77 埋文桜ニュース

78 埋文桜ニュース

79 埋文桜ニュース

80 埋文桜ニュース

81 埋文桜ニュース

82 埋文桜ニュース

83 埋文桜ニュース

84 埋文桜ニュース

85 埋文桜ニュース

86 埋文桜ニュース

87 埋文桜ニュース

88 埋文桜ニュース

89 埋文桜ニュース

90 埋文桜ニュース

91 埋文桜ニュース

92 埋文桜ニュース

93 埋文桜ニュース

94 埋文桜ニュース

95 埋文桜ニュース

96 埋文桜ニュース

97 埋文桜ニュース

98 埋文桜ニュース

99 埋文桜ニュース

100 埋文桜ニュース

令和4年度の調査予定地図

愛知県の地図上に配置した、実在の城に擬似的に向かって輪投げを行ってもらい、その得点に応じて缶バッジを配布した。

*参加者数：75名

「お宝記念撮影」

撮影台を用意し、これまでに調査した遺跡の出土遺物の優品を数点設置して来場者に自由に撮影してもらった。

「火起こしマスター」 *参加者数：34名

▲「埋文桜ニュース」

秋の埋蔵文化財展「悠久の記憶～設楽ダム関連発掘調査成果展～」

- 1.会場 設楽町奥三河郷土館2階 企画展示スペース
- 2.会期 令和4年8月31日(水)～9月26日(月) 【来場者総数:2,418名】
- 3.実施体制

本事業では、設楽町との共催で実施したほか、事業者である国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所にも展示に参画して頂けたことは、これまでの埋蔵文化財展になかったことであり、画期的なものとなった。愛知県埋蔵文化財調査センターをも含めた実施体制は、下図左の通りである。

4.内容

今回の展示コンセプトは、以下の三本の柱に立脚している。

- 1.設楽ダム関連調査成果の紹介
- 2.埋蔵文化財調査過程・内容の紹介
- 3.埋蔵文化財調査記録の重要性と活用の紹介

上記に加えて、今回の展示は、令和3年度までに公表された発掘調査成果および室内整理調査の成果内容に限定したものであり、設楽ダム関連調査の報告としては、途中経過的な位置づけとなっている。それでも、笹平遺跡の調査成果を軸に、縄文時代から江戸時代までの調査成果を紹介する内容となっており、展示コンセプト1の目的はある程度達成することができている。展示コンセプト2・3に関しては、パネルや映像展示をも加えて紹介をしたところである。写真の起き上がり小法師も図面記録の活用の一環で製作した(下図最右下)。

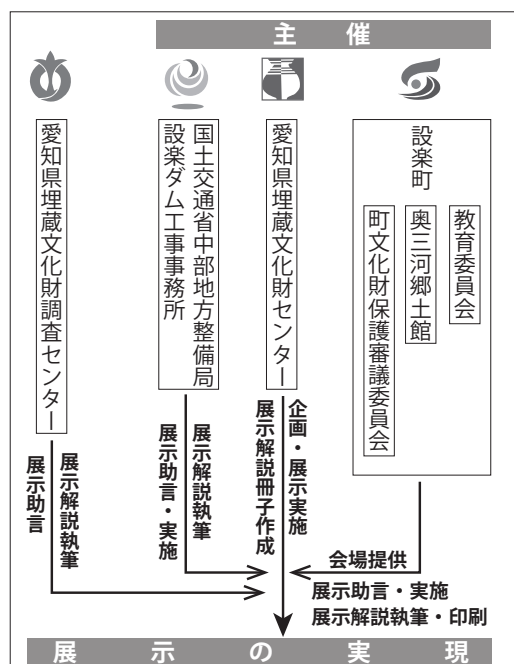
5.関連イベント

8月31日(水)・9月10日(土)・9月17日(土)・9月24日(土)の四日間、午前11時からと午後2時からの各日2回、埋蔵文化財センター職員による展示解説を実施した。参加者は総計178名である。

6.総括

設楽ダム関連調査では、縄文時代の資料がまとまって見つかったものの、その歴史的意義などの紹介についてはごく一部に留まった。将来、成果が出揃った時点で普及企画が望まれるところである。

(川添和暁)



令和4年度秋の埋蔵文化財展 実施体制



展示の様子

あいち朝日遺跡ミュージアム企画展「あいちの発掘調査2022」

2022(令和4)年度より、県文化財室の委託事業として、清須市のあいち朝日遺跡ミュージアムにおいて、企画展「あいちの発掘調査2022」を開催した。期間は2023(令和5)年1月21日(土)から3月12日(日)までの44日間(月曜休館)である。

企画展のコンセプトは、愛知県埋蔵文化財センターの発掘調査成果に加えて、県下市町村の最新

調査成果を併せて展示するというものである。

展示する遺跡の調査成果が地域によってばらつかないように、今年度は県下を尾張地区・名古屋地区・知多地区・西三河地区・東三河地区・奥三河地区の6地区に分けて、それぞれの地区から1遺跡ずつを選んだ。



「あいちの発掘調査 2022」チラシ



「あいちの発掘調査 2022」普及本表紙



企画展示室の展示状況



成果報告会1の開催状況

取り上げた遺跡は、
尾張地区—下田南遺跡(稲沢市)、
名古屋地区—史跡断夫山古墳(熱田区)、
知多地区—石丸遺跡(大府市)、
西三河地区—岡島遺跡(西尾市)、
東三河地区—史跡馬越長火塚古墳群(豊橋市)、
奥三河地区—大崎遺跡(設楽町)である。

さらに、あいち朝日遺跡ミュージアムの基本展示と関連性をもたせるために、2019(令和元)年度に愛知県埋蔵文化財センターが行なった朝日遺跡の発掘調査成果を加えている。

なお、展示する発掘調査成果は基本的には前年度(2021年度)を中心としているが、同じ遺跡の過去の調査成果も一部加えた。

来場者数は、2月7日時点で928名である。

会期中に愛知県埋蔵文化財センターの主催で開催したイベントは、

1月22日(日)成果報告会1「三河の遺跡」(ミュージアム研修室、報告:鈴木とよ江氏・社本有弥氏)参加者36名。

2月5日(日)ミニシンポジウム「尾張と東三河の首長墓」(春日公民館、講演:広瀬和雄氏、報告:早野浩二氏・岩原剛氏)参加者128名。

2月26日(日)成果報告会2「尾張の遺跡」(ミュージアム研修室、平松久和氏・島軒満氏)

企画展のパンフレットとは別に、2021(令和3)年度の愛知県内における発掘調査成果の概略をまとめた成果本「あいちの発掘調査2022—近年の発掘調査の概要—」を7,000部印刷し、ミュージアムでの展示ならびに県内の関係諸機関に配布した。

(樋上 昇)

あいち朝日遺跡ミュージアム

あいち朝日遺跡ミュージアムでは毎年4回、ミュージアムの認知度を高めるために、子供向けの大規模なイベントを実施している。このうち8月にはナイトミュージアムとして、16時から20時までミュージアムを夜間開放し、ゲームや考古学体験、物販などを行なっている。

愛知県埋蔵文化財センターでは、ミュージアム

ナイトミュージアムへの出店

の指定管理者からの依頼を受け、ミュージアム本館の体験学習室において、べっこう飴による鋳込み体験を実施した。

日時は8月20日(土)の16時からと18時からの2回で、合計で来場者18名が参加し、巴形銅器9個、銅鐸9個を作っていただいた。

(樋上 昇)



べっこう飴による巴形銅器の鋳込み体験



べっこう飴による銅鐸の鋳込み体験

連続歴史講座

目的：愛知県内外の考古学に関する成果などを広く一般県民に公開するための歴史講座を開催する。

場所：愛知県埋蔵文化財調査センター 2階 研修室

時間：いずれも午前10時30分より開催。参加費は無料。

	日時	タイトル	講師	参加人数
第1回	4月9日	尾張中世城館について考える	鈴木正貴	20人
第2回	4月23日	瀬戸市・桑下城跡から考える	武部真木	14人
第3回	5月14日	稲沢市・一色城跡から考える	永井邦仁	19人
第4回	5月28日	清須市・清洲城下町遺跡から考える	蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴	15人

例年5月から6月にかけて実施しているが、本年度は施設全体の長寿命化工事による6月からの閉館に対応するため4月から5月にかけて4回開催した。本年度の連続歴史講座は「尾張中世城館の考古学」というテーマであった。新型コロナウイルス感染防止対策を講じた上、参加者の方にはマスクの着用、検温、アルコールによる手指の消毒の実施、ソーシャルディスタンスを保つため座席の空間を空けて聴講をお願いした。「城」という参加者にも馴染みのあるテーマであったためか、各回とも講師への熱心な質問が見られた。昨年と同様、コロナ禍にも関わらず多くの方々にご参加をいただき、講座を無事実施することができた。

(鬼頭 剛)



愛中日文化センター協力講座

上半期は4月19日・5月17日・6月21日の毎月第3火曜日で、テーマは『「史跡 断夫山古墳」を解き明かす』として実施した。

「史跡 断夫山古墳」は3,000基以上ある愛知県の古墳の頂点に君臨する。「あゆち湯」の覇者にふさわしいその偉大な姿から、古墳は熱田神宮とミヤズヒメの伝説、『古事記』や『日本書紀』に登場する尾張連との関連が常に注目されてきた。

尾張の古代史を語る上で欠かせないこの古墳に、

令和になってようやく発掘調査の第一歩が記されることになった。本講座では断夫山古墳の具体像に様々な角度から迫り、愛知県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の最新の成果についても紹介した。

4月19日は、「第1講 景観・履歴から読み解く」として、古墳が立地する地形、周辺の遺跡から、古墳の地理上、歴史上の景観を概観した。併せて名の言われ、古墳の沿革を辿り、発掘調査が行われ

第11回 考古学セミナー「あいちの考古学2022」

概要： 考古学セミナー「あいちの考古学」は、愛知県内および近隣地域で活動する県・市町村教育委員会、公益財団法人、大学、特定非営利活動法人(NPO)、研究グループ、関連企業などが一堂に会して遺跡調査と考古学に関係する研究成果を広く一般に公開し情報を共有することを目的に、平成24年度より開催している。

昨年度同様、新型コロナウイルス感染症対策のため、講堂で行われるシンポジウムとプレゼンテーションに関しては、事前予約制(各日100名まで)として実施した。(河嶋優輝)

主 催 名古屋市博物館・愛知県埋蔵文化財センター
日 時 10月22日(土)13時～16時
10月23日(日)10時～16時
会 場 名古屋市博物館 講堂・展示説明室
参加者数 10月22日(土) 152名・23日(日) 181名 合計333名
出展団体・個人 プレゼンテーション9、ポスターセッション16(エントリー制)

◎10月22日(土)13時～16時(12時30分開場)

13:00～13:10 開会あいさつ

<シンポジウム>『古代あいちの流通と交通』

13:10～14:10 「古代の東海地方の流通と交通」
近江俊秀(文化庁文化財第二課)

14:10～14:20 小休憩

14:20～14:25 「趣旨説明」
河嶋優輝(愛知県埋蔵文化財センター)

14:25～14:45 「集落の変遷からみた古代のあいち」
永井邦仁(愛知県埋蔵文化財センター)

14:45～15:05 「寺院の展開からみた古代のあいち」
梶原義実(名古屋大学)

15:05～15:25 「古代あいちにおける土師器甕の分布と流通」
尾崎綾亮(愛知県埋蔵文化財調査センター)

15:25～15:35 小休憩

15:35～16:00 パネルディスカッション
近江俊秀・永井邦仁・梶原義実・尾崎綾亮・河嶋優輝(司会)

16:00 2日目の案内

◎10月23日(日)10時～16時(9時30分開場)

10:00～10:10 2日目日程・連絡

<プレゼンテーション>

10:10～10:30 「曽我遺跡・墓ノ本遺跡土壌洗浄業務」
白樫 淳(株式会社 アコード)

10:30～11:00 「先史時代人の行動復元2—川向東貝津遺跡ではどんな石が使われた?—」
神取龍生・平井義敏・田中 良・野村啓輔・
松田莉歩・加藤大智・飯塚寿音(東海石器研究会)

11:00～11:10 小休憩

11:10～11:30 「愛知県新城市萩平遺跡の発掘成果」
杉山歩夢・遠矢 仁(愛知学院大学大学院)

11:30～11:50 「史跡 馬越長火塚古墳群の発掘調査」
岩原 剛(豊橋市文化財センター)

11:50～12:00 宣伝タイム

- 12:00～13:30 昼休憩
- 13:30～14:00 「古湊を介した尾張産窯業製品の遠隔流通―琵琶湖湖底遺跡の水中考古学調査を事例に―」
中川 永(豊橋市美術博物館)
- 14:00～14:20 「東海地域の角杯と皮袋形瓶について」
陳 永強(名古屋大学大学院)
- 14:20～14:30 小休憩
- 14:30～14:50 「壬申の乱1350年、久留倍官衙遺跡を紹介します」
大原涼子(くるべ古代歴史館)
- 14:50～15:10 「中世猿投窯の特殊品生産―瓦を中心として―」
寺井崇浩(愛知学院大学大学院)
- 15:10～15:30 「犬山城大手門枳形跡(犬山市福祉会館跡地)発掘調査」
中野拳弥(犬山市教育委員会)
- 15:30 閉会あいさつ

<ポスターセッション>

- 「曾我遺跡・墓ノ本遺跡土壌洗浄業務」
白樫 淳(株式会社アコード)
- 「先史時代人の行動復元2―川向東貝津遺跡ではどんな石が使われた?―」
神取龍生・平井義敏・田中 良・野村啓輔・松田莉歩・加藤大智・飯塚寿音(東海石器研究会)
- 「古湊を介した尾張産窯業製品の遠隔流通」
中川 永(豊橋市美術博物館)
- 「東海地域の角杯と皮袋形瓶について」
陳 永強(名古屋大学大学院)
- 「壬申の乱1350年、久留倍官衙遺跡を紹介します」
大原涼子・大野路彦(くるべ古代歴史館)
- 「設楽町 設楽ダム事業に伴う発掘調査2022」
愛知県埋蔵文化財センター
- 「伊川津貝塚・吉胡貝塚出土遺物の赤色顔料分析について」
清水俊輝(田原市教育委員会)
- 「みてみよう、さわってみよう、ヒトの骨」
藤田 尚(株式会社パレオ・ラボ)
- 「西尾市佐久島 平古1・2号墳の調査」
三田敦司・浅岡 優(西尾市教育委員会)
- 「文化財調査における新技術の紹介」
山田哲也(株式会社イビソク)
- 「岐阜県御嵩町願興寺の発掘調査」
秋松大允・浅井飛音(名古屋大学)
- 「古代の鈴鹿 国府・国分寺」
吉田真由美(鈴鹿市考古博物館)
- 「3Dモデルを用いた、遺構・遺物のデジタル実測支援について」
加藤 達(株式会社CUBIC)
- 「犬山焼調査報告―近代犬山焼の窯元について―」
青木 修・佐久間真子・井上あゆこ・中野耕司・鈴木智恵(犬山焼ミュージアム)
- 「尾張名古屋博物館目録に描かれた考古遺物―銅鏡を中心として―」
高尾将矢(株式会社ノガミ)
- 「安城市内の発掘調査成果」
安城市埋蔵文化財センター
- 「図書情報」
考古学フォーラム・東海石器研究会・三河考古学談話会



▲告知チラシ・当日配布資料集



▲シンポジウム・プレゼンテーション会場入口



▲シンポジウム・近江俊秀氏の講演



▲シンポジウム・パネルディスカッション



▲プレゼンテーション



▲ポスターセッション会場 (入り口から)



▲ポスターセッション会場 (奥から)



▲ポスターセッション会場 (展示の様子)

V. 埋蔵文化財センターの活動

資料の貸出・提供

貸出先	目的	遺跡名	資料名	期日
国立大学法人東海国立大学機構 名古屋大学防災連携研究センター	名古屋大学防災館1階の防災ホールにて展示	清洲城下町遺跡	天正地震における液化化痕跡の創り取り（清洲城下町遺跡）1点	合計1点 2022.4.1
あいち朝日遺跡ミュージアム	企画展「一色青海遺跡100年の発見ムツ」	一色青海遺跡 朝日遺跡	第147集 一色青海遺跡 II (147-125.jpg, 147-025.jpg, 147-CD.jpg, 147-689.jpg, 147-702.jpg) 第186集 一色青海遺跡 III (186-426.jpg, 186-671.jpg, 186-672.jpg, 186-679.jpg) 第30集 朝日遺跡 I (030-092.jpg) 第154集 朝日遺跡 VIII (050a_d-034d.jpg, 図 1.3-10, 図 A 068b 地層増殖写真) 一色青海遺跡 2021年度調査成果報告より（航空写真、遺跡全体図）	計14点 2022.4.16
株式会社アッシュ	刊行物「他国で楽しむ本郷にすこい愛知」	朝日遺跡	第30集 朝日遺跡 (030-007.jpg) 第34集 朝日遺跡 バレス登 (034-034.jpg)	計2点 2022.4.22
株式会社山川出版社	刊行及び電子書籍「戦国城郭にみる祈りと呪い」	岩倉城遺跡	第36集 岩倉城遺跡 108 p (第98図 呪所関係木製品)	計1点 2022.6.6
中日新聞	新聞記事（2022年6月11日以降の掲載予定）	名城公園遺跡	調査時の写真	計4点 2022.6.7
株式会社労働行政	刊行物「月刊シルシ／人財センター」（2022年8月号以降に掲載予定）		調査センター外観、実測作業の様子、展示の様子	計3点 2022.6.8
日本放送協会	番組『歴史探偵 橋梁間の戦い』	清洲城下町遺跡	鈴木 正貴（出演） 清洲城下町遺跡 発掘調査現場	2022.6.27
学校法人 司合塾	大学受験用模範試験問題への掲載及び高等学校教員用学習指導用資料	朝日遺跡	朝日遺跡の多量防衛施設画像	計1点 2022.7.11
株式会社鎌山閣	季刊考古学・別冊38号「日本列島の人類史と製塩」特集号	松崎遺跡・土浜田遺跡	第182集 松崎遺跡・土浜田遺跡 写真図録より 遺跡写真 (182-074.jpg, 182-077.jpg)	合計2点 2022.7.18
公益財団法人瀬戸市文化振興財団	企画展「戦時下のせとやき-近代後期の瀬戸窯と美濃窯-」	北山窯跡	第214集 北山窯跡 遺跡写真より (214-015.jpg, 214-018.jpg, 214-022.jpg, 214-040.jpg)	合計4点 2022.7.26
個人	中日新聞社が小中学生向けに発行する「中日こどもウォークリー」に掲載		『遺跡の調査』に掲載写真より p.2 堅穴建物を掘っているところ 2 p.3 遺跡を取り上げているところ 2	合計4点 2022.8.9
個人	中日新聞社が小中学生向けに発行する「中日こどもウォークリー」に掲載		『遺跡の調査』に掲載写真より p.5 測量しているところ 1点	合計1点 2022.8.30
西尾市教育委員会	『新編西尾市史 通史編Ⅰ 原始・古代・中世』	足遺跡 回島遺跡	第49集 足遺跡 巻頭カラー1 大型木橋 (049-001.jpg) 図版23 左4 SED9 (049-017.jpg) 第14集 回島遺跡 図版33 四段目 SQ24 → 25 → 26 (014-005.jpg)	合計3点 2022.8.30
株式会社読活社	書籍「常馬台国へー遺跡」（古代史エッセイ）（2023年2月刊行予定）	朝日遺跡	第138集 朝日遺跡 地形図（上面・下面）写真 2点	合計2点 2022.9.1
個人	考古学セミナーにて発表	赤賀公園遺跡 モリ下遺跡	第90集 赤賀公園遺跡 (090-114.jpg, 090-116.jpg) 第196集 モリ下遺跡 (196-307.jpg)	合計3点 2022.10.17
名古屋市教育委員会	特選！しだみ古墳群ミュージアム令和4年度きの企画展示	池下古墳	第24集 池下古墳 写真データ (024-001.jpg, 024-002.jpg, 024-003.jpg, 35KU-051.jpg)	合計4点 2022.10.28
安西工業株式会社	社内ホームページ及びフェイスブック・インスタグラムで会社実績として利用	中枝間遺跡	中枝間遺跡22A区全景動画	合計1点 2022.11.11
株式会社イビシク	会社の実績紹介を目的に社ホームページに掲載	大崎遺跡	令和3年度・大崎遺跡 調査写真	合計1点 2022.11.15
株式会社アコード名古屋営業所	株式会社アコードが配布する年賀状に掲載	下延坂遺跡	下延坂遺跡 発掘調査風景	合計1点 2022.12.22
株式会社アコード名古屋営業所	ISO9001取得に向けての資料として利用	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡・下延坂遺跡・大畑遺跡・津瀬遺跡・大崎遺跡・マサノ沢遺跡 発掘調査風景	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡・下延坂遺跡・大畑遺跡・津瀬遺跡・大崎遺跡・マサノ沢遺跡 発掘調査風景	2023.1.11

ホームページ

今年度は、ホームページ上で閲覧できる実測図および報告書掲載写真の点数の増加に努めた。その結果、遺跡アルバムでは、昨年度44,999点であったものが45,037点に、実測図では、17,619点であったものが31,373点と大幅に増大した。

また、昨年度に引き続き、発掘調査の成果を動画サイトにて公開配信を行った。新型コロナウイルス感染症対策や遺跡の立地箇所・調査期間の関係から地元説明会が実施できなかった遺跡を中心に、Webでの調査成果の説明動画を作成し公開した。合わせて、調査成果の概要を解説した資料のPDFの公開も実施した。

報告書PDF	269点
説明会資料	111点
年報PDF	526点
研究紀要PDF	226点
各遺跡の広報誌	195点
埋蔵文化財展資料	19点
講座資料	37点
その他チラシ類	87点
遺跡位置登録	271点
写真登録（遺跡アルバム）	45,037点
実測図登録	31,373点

▲公開データ数

遺跡名	市町村	公開日	視聴回数	公開条件等
郷中遺跡	大口町	2022年11月	221回	限定公開
内貝津橋遺跡	設楽町	2022年10月	121回	限定公開
下品野遺跡	瀬戸市	2022年9月	151回	公開中（2023年1月時点）
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	設楽町	2022年8月	141回	限定公開
引田遺跡	東栄町	2022年4月	130回	限定公開 R3年度調査
清洲城下町遺跡	清須市	2022年4月	144回	限定公開 R3年度調査
下品野遺跡	瀬戸市	2022年4月	111回	限定公開 R3年度調査
新設案発見伝8	設楽町	2022年3月	403回	限定公開 R3年度調査
1令和3年度設楽ダム関連発掘調査の概要			97回	
2笹平遺跡			74回	
3上ヲロウ・下ヲロウ遺跡			46回	
4下延坂遺跡 縄文時代晩期			38回	
5下延坂遺跡 縄文時代中期			40回	
6大崎遺跡			57回	
7大崎遺跡			51回	

▲YouTubeでの動画配信（令和5年1月末現在）

地元説明会・成果報告会				
遺跡名等	所在地・開催地	開催日	参加人数	種別
名城公園遺跡	名古屋市北区名城1丁目	令和4年5月28日	370名	地元説明会
大崎遺跡	設楽町田口字大崎	令和4年8月20日	7名	地元説明会
野添遺跡	豊橋市石巻本町西下地	令和4年10月8日	50名	地元説明会
下延坂遺跡	設楽町川向字下延坂・上延坂	令和4年10月29日	20名	地元説明会
中狭間遺跡	安城市桜井町中狭間	令和4年11月3日	100名	地元説明会
花の木北遺跡	豊川市大木町新道	令和5年2月11日	43名	地元説明会
清洲城下町遺跡	清須市市場地内	令和5年2月23日		地元説明会
新設楽発見伝9	田口特産物振興センター（設楽町田口）	令和5年3月4日		成果報告会
断夫山古墳	名古屋市旗屋二丁目	令和5年3月5日		地元説明会

報告書作成のための指導			
遺跡名	指導者	指導日	所属
万瀬遺跡	金子健一	令和5年3月13日	(公財) 瀬戸市文化振興財団
	矢野健一	令和5年3月22日	立命館大学
	増子康真	令和5年3月24日	長野県埋蔵文化財センター
南山町遺跡	城ヶ谷和広	令和5年3月7日	愛知県埋蔵文化財調査センター
白木遺跡	城ヶ谷和広	令和5年3月7日	愛知県埋蔵文化財調査センター

発掘調査における遺構・遺物などの指導			
遺跡名	指導者	指導日	所属
下延坂遺跡	綿田弘実	令和4年10月27日	長野県埋蔵文化財センター
	〃	令和4年12月20日	〃
大畑遺跡	馬場保之	令和4年12月7日	伊那市役所
中狭間遺跡	石井智大	令和5年2月16日	三重県埋蔵文化財センター
断夫山古墳	森 泰通	令和5年2月20日	豊田市役所
	中井正幸	令和5年2月21日	岐阜聖徳学園大学
	岩原 剛	令和5年2月24日	豊橋市文化財センター

令和4年度 愛知県埋蔵文化財センター 組織一覧

運営協議会委員

加藤安信	元学校法人大同学園 顧問
金田明大	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター長
城ヶ谷和広	愛知県埋蔵文化財調査センター
高本訓久	愛知県都市教育長協議会 会長（江南市教育長）
竹内 誠	名古屋大学大学院環境学研究科 教授
都築暢也	元中京大学文学部歴史学科 客員教授
古尾谷知浩	名古屋大学大学院人文学研究科 教授
森岡士郎	愛知県県民文化局 文化部長

センター長	高橋寿人
管理課	
管理課長	高田 諭
主 任	矢野茂樹
主 事	青山徳彦
主 事	村岡 香

調査課

調査課長	鈴木正貴
主任専門員	樋上 昇 堀木真美子
	永井宏幸 鬼頭 剛
調査研究専門員	武部真木 蔭山誠一
	川添和暁 永井邦仁
	早野浩二
調査研究主任	鈴木恵介 酒井俊彦
	池本正明
調査研究主事	田中 良 河嶋優輝
	渡邉 峻 社本有弥
	宮腰健司 石黒立人
	木村有作

専門委員

考古学	伊藤秋男	南山大学 名誉教授
岩石学	榎並正樹	名古屋大学 名誉教授
考古学	柴垣勇夫	元愛知淑徳大学 教授
形質人類学	多賀谷 昭	長野県看護大学 特任教授・名誉教授
古代史学	西宮秀紀	愛知教育大学 名誉教授
考古学	藤澤良祐	愛知学院大学文学部 教授
建築史学	濱田晋一	名古屋工業大学大学院 准教授
木材組織学	吉田正人	名古屋大学大学院生命農学研究科 准教授
保存科学	脇谷草一郎	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 保存修復科学研究室長

年報 令和4年度

令和5年3月

編集・発行 (公財) 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社